
ラビリンス

96猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラビリンス

【Nコード】

N6161T

【作者名】

96猫

【あらすじ】

かつてから不可能と言われ続けていた仮想空間への接続。しかし、それは3年前までの話だ。3年前のあの日……世界中のあらゆるメディアから注目される中、日本中のゲーマー達が切望し続けたそのゲーム 世界初のVRMMORPGが発表された。日本中のゲーマー達は歓喜し、この記念すべき日を祝福した。しかし、その感動から一転、絶望の淵へと叩き落とされた。

VR世界での 死 がそのまま現実世界の 死へと直結する究極のデスゲーム。

人々が絶望に頭を抱える中、その瞳に希望を宿す一人の少年がいた
主人公最強物でハーレム(?) 風のお話になる予定です。

プロローグ 『真実の世界』

赤眼のドラゴンが大気を震撼させるかの如く雄叫びを上げた。

直後、ドラゴンの巨大な足が俺の頭上付近にまで迫っていた。その瞬間、一気に前方へとダッシュし、ドラゴンの足が到達するより早く股下へと潜り込み、その勢いを殺さぬまま背後へと回り込んだ。

「はあっ……………」

肺の中に溜まった酸素を吐き出すと同時に右手に持った片手剣で斬りかかろうとしたその時、ドラゴンが振り向きざまに尻尾を鞭のようにしならせて攻撃をしてきた。

咄嗟にバックステップで距離を取ろうとしたものの、こちらの想像以上の速度だったため、避けきれずに脇腹へと浅い一撃を食らってしまう。

激痛とともに視界の左下にある緑色の横線 HPバーと呼

ばれる俺の生命の残量を示すゲージが一気に黄色まで減った。HPバーの色は信号と同じようなもので、一般に緑が安全域、黄色が注意域、赤が危険域とされている。つまりは、今のたった一回の攻撃で半分近くは減らされたことになる。

「さすがは新種のSS級モンスターといったところか……。出し惜しみはしてられないようだな……………」

俺は独りでそう呟いた後、左手を宙に掲げて魔力を込める。瞬く間に現れた刀身の感覚を確かめるため

一度空中で剣を振るった後、地を蹴りドラゴンへと突進した。

ドラゴンのほうもこちらの突進に合わせて自らの爪を振りおろしてきたが、剣を横薙ぎに振るいそれを上回る臂力で弾き返した。さらに追い打ちをかけ、すれ違いざまに無数の斬撃を浴びせた。

斬撃を受けたドラゴンは崩れ落ちるように倒れ、そこから微動だにしなかった。これは《パリスス・スラッシュ》　　斬った標的を麻痺させる連続剣技だ。

本来対ボス級モンスターの上位捕獲スキルとして用いられていた《パリスス・ブレイク》を剣技に応用したオリジナルの複合技である。

まだ麻痺の効果が持続しているのか、未だに動く素振りを見せない敵に対して止めを刺すべく、俺は詠唱に入った。

数秒後、あたり一面がみるうちに黒煙へと包まれていく。大気中に充満した黒煙は一ヶ所へと集まり、徐々に形を成していく。詠唱が終わるころには視界の妨げにすらなっていた量の黒煙は綺麗になくなり、巨大な弓矢として姿を変えていた。

俺は遠隔操作でその弓矢を操り限界まで弓を引き絞る。今倒れているドラゴンの頭部に狙いを定め矢を解き放った。

放った矢は、軽く音速を凌駕し、雷の超圧縮エネルギーと化して見事に命中。ズドオオオオオン！！　という凄まじい効果音とともに周囲を焼け焦がした。

「グアアアアアアアッ！！！」

上位魔法《ライトニング・アロー》を食らったドラゴンはおぞましい断末魔の叫びの直後、パライイイイン！　というガラスが割れるようなエフェクト音とともに跡形もなく消え去った。

これはこの世界においての 死 を意味する。あまりにも簡素で無機質な死。通常の 死 という概念からあまりにもかけ離れた死 の光景。俺はそれを一瞥し、完全に消滅したのを確認してから、二刀の剣の片方を鞘に収め、もう片方は宙に掲げると同時にパラパラと音を立てて霧散した。

「ぐっ……あ……」

次の瞬間、俺は脇腹に鋭い痛みを感じ、その場に立っていられなくなつて地面に崩れ落ちた。戦闘に夢中になり忘れかけていたが、すでに俺のHPは残り半分である。戦っている最中は、痛みをあまり感じなかったが、緊迫した状況下から逸脱した安心感からか、疲労感が息を吹き返したように体に休息を求めてくる。

この苦痛、疲労感。作り物とは思えない いや、きっと本物なのだろう。事実、俺が存在するこの世界 VRMMOR

PGと呼ばれるこの世界は、視覚や聴覚をはじめとする五感の情報はもちろん、行動に睡眠も必要とされ、痛みや疲労感、排泄感や空腹感、などの情報も《コードギア》を通じて直接脳に送られ、現実世界をそっくり忠実に再現 いや、VR世界でのモンスターとの戦闘で生じる痛みなどは現実世界では体験することなどない……そういう意味では現実世界以上のリアルさであるといっても過言ではないだろう。

傷が痛む。とはいえ、いつまでもここに座りこんでいては他のモンスターの格好的になるだけだ。疲労と痛みで腕を動かすことさえ億劫に感じたが、気力を振り絞り視界右下にあるアイテムウィンドウを開いた。いつもなら回復アイテムを使い街まで徒歩で帰って行くのだが、生憎と今はここに来るまでに回復アイテムを使い切っ

てしまいストックがない状態なのだ。だからと言ってこのままの状態ですら徒歩は無理がある。

俺はしぶしぶ《転生の書》と呼ばれるアイテムを選択する。これはとても高価でこれだけでそこそこの防具一式が揃えられる値段だ。しかも使用できる回数は一度のみ、一度使ってしまったらただの紙切れだ。

若干意識が朦朧としはじめる中、俺は転生の書を読んだ。いや、詠んだと云うべきか。詠み終わった後、俺の体が光の粒子に包まれる。直後、猛烈な睡魔に襲われる。

「やっぱ単独でSS級モンスターは無理があったかな……今度からは……パーティーで……来よう……」

そう自分に言い聞かせるように呟いた後、床に身を預けるようにして横たわった。薄れゆく意識の中ふと3年前を思い出す。

3年前のあの日……世界的にメディアにも取り上げられたゲーム《ラビリンス》が発表されたあの日のことを。

忘れもしない……忘れられるわけがない。俺を含めた日本中のゲーマーが歓喜し、絶望の淵へと立たされたあの日のことを

プロローグ 『真実の世界』（後書き）

お見苦しい文章になっていなければ良いのですが……
差し支えなければ、感想をお願い致します。

ブローグ（2） 『VRMMORPG』

2025年、日本のIT産業は飛躍的な進化を遂げ、かつてから不可能と言われ続けていた仮想空間への接続を現実のものとした。

最初はカプセル型の装置が発表された。しかしこの装置にはいくつかの欠点があった。一つは、長時間のダイブが不可能だということ。一定のデータ量を超えると処理が間に合わなくなり、強制的にダイブが解除されてしまうのだ。もう一つは送られてくる情報の伝達が遅く、度々フリーズがあるため、ゲームができた環境ではないということだ。これには多くのゲーマーが大いに不満を募らせたものだ。

しかし、そこから2年間の改良を重ねるうちに、装置は徐々にコンパクトになり、最終的には頭から顔を覆うヘルメット状になるまで縮小化した。さらに与えられる情報を電磁波として脳に一点集中することによって、かつての欠点を一つずつ解消していった。

《コードギア》。

それがこの装置の名称だ。

コードギアから送られてくる情報はユーザーの脳へと直接送られ、仮想空間内で五感を通じて得た情報を、そのまま見たり聴いたりすることができるのだ。

発売前は、痛みや疲労感といった情報は送られるのではないか？ということが危惧されたが、その心配は杞憂だったようで、痛み、疲労感、排泄感、倦怠感などの余分な情報はカットされていて、安

全にゲームをプレイできるようになっていた。

とはいえ、現実世界での自分の体に向けて出力される脳からの情報は遮断されることになっている。しかし、これはダイブをする上で非常に重要な機能だ。この機能がなければ、仮想空間での自分の一挙手一投足が現実世界の自分の体にも反映してしまうからだ。

様々な問題を解消し、コードギア発売から一年。2028年12月24日、世界初のゲームジャンル、VRMMORPG《仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム》
《ラビリンス》が発売された。

ラビリンスは、その名の通り地下迷宮が舞台となっていて、地下120層にも及ぶ超大規模ダンジョンだ。地下迷宮といっても、石や鉄で囲まれた従来の地下迷宮の構造ではなく、一定の層ごとに砂漠エリア、雪原エリア、樹海エリア、草原エリアetc……など、他にも様々なエリアが存在し、それぞれのエリアを過ぎることに、街や村、迷宮都市などが存在する。

俺はもちろん発売2か月前のベータテストにも参加した。募集人数が先着1500人という少数に対し、応募人数が15万人と殺到する中、奇跡的にその枠の中に入ることができた。

自らのアバターを作り、初めてVRMMORPGの世界へとダイブした時の興奮と感動は今も鮮明に覚えている。空や地面、街やフィールドのグラフィックは現実世界と全く同じ　いや、それ以上の臨場感でそのすべてに圧倒された。そして何より、自らが剣技や魔法を行使してモンスターと戦い、フィールドを駆ける爽快感は言葉では形容しがたいものがあった。

それからと云うものの、俺はVR世界に深く魅了され、家にいる時間はすべてダイブに消費した。最低限時間を割いたのは、食事と睡眠、それと、一つ年下の妹をストーキングすることくらいだ。（変な虫がつくといけなからな……仕方ないことだ）

学校にいる時間はすべて睡眠と学年が一つ下の妹の観察（シスコじゃない。ただ妹が大好きなだけなんだ！）に費やした。それだけではない。時折学校をサボったり、早退したりしてインターネットカフェでもダイブをするようになった。もちろん妹の観察は欠かさない。

その事実（妹の観察ではなく、サボっている事について）を知った学校の教員や家族から注意を受けたものの当時の俺の耳には届かなかっただろう。

ベータテスト期間が終了し、データがリセットされた時はショックのあまり1週間は立ち直れなかったが、公式HPでベータテストの特典内容が掲載されているのを見て歓喜した。

その内容は、使用したキャラクターのパラメータの1割が引き継ぎ可能ということだった。加えて、ベータテストの際送られてきた試作品のパッケージを店頭で見せると、優先的な購入が可能とのことだった。

そして正式パッケージ発売から1週間経ち、現在
202
8年12月31日、午後11時45分。

西暦が終わり新年が始まると同時に《ラビリンス》正式サービスが開始される。

ベットに座り時計と睨み合いをしながら待ち続け、14分と50秒が経った。テレビでは新年のカウントダウンが始まった……

3……………2……………1……………《リンク・スタート!!》

その日、日本中が歓喜し、絶望の渦へと巻き込まれた。

ブログ(2) 『VRMMORPG』(後書き)

読んでいただき有難う御座います。

差し支えなければ感想よろしくお願い致します。 by 96猫

1話 『仮想現実』

「カイト君！！ そっちに一匹行つたよ！！！」

声のした方を向くと、黄土色の猫が二息歩行でこちらに猛ダツシユをしてきていた。体長は俺の膝元に届かない程度で、容貌も普通の猫と変わらない。相違点を挙げるとすれば、自らの体長（二息歩行時）の3倍以上もある巨大なドリルを肩に抱えているということと、二足歩行という事くらいだろう。

「ってアホか！！！！！」

シュールすぎる！！！ 一体何故！？ わけがわからん！！！！
とはいえ、殺らなければこちらが殺られてしまふ。死んだところで始まりの街に転生するだけだが、迷宮に来る以前の状態つまり、街を出る時の状態で転生される。せつかくレベルが上がったので、それだけは避けたいところだ。

などと思案していると、黄土色の猫

《ヘビーキャット》

が通常の声の大きさで会話ができるほどの距離まで迫ってきていた。俺は慌てて背中の中鞘から剣を抜き、繰り出される攻撃に備えて剣を上段で構えた。

「ニヤア！！！！」

可愛らしい掛け声とともに放たれたまるで可愛くない攻撃は、俺の予想の範疇を超えるものだった。なんと、この超至近距離であれだけのドリルを投げつけてきたのだ。しかし、多少の想定外な出来事に軽く動揺したもの、すぐに体勢を立て直し冷静に対処した。

凄まじい速度で投げられたドリルを、正面から受け止めるのではなく、攻撃の圧力を外に逃がすように受け流し、ダッシュで一氣に距離を詰め、踏み込みと同時に剣を水平に振り切った。

「ニヤアアア!? ……痛い…よう……苦しい…よう……助けて、お母さん……」

俺の一太刀を受け、力尽きたように倒れこむヘビーキャット。息も絶え絶えの状態で言葉を紡ごうとしている。

「っってお前喋れたんかい!?!」

しかも言ってるセリフがおかしいような気がするのは俺だけだろうか? このシーンだけを切り取れば十中八九俺が悪者である。俺が複雑な気持ちでその光景をながめていると、ヘビーキャットは最後の力を振り絞りこちらを振り向いた。

「……どう…し…て……」

次の瞬間ヘビーキャットの体は甲高いエフェクト音とともに粉々に砕け、ポリゴンの欠片へと姿を変えた。

「……………」

どうしてもクソもあるか!! お前肩に担いでいた武器を見る! ！ 殺る気満々だろうが!! 俺に死ねと? 次々と浮かび上がる心の葛藤を振り払うべく壁に頭を打ち付けていると、見慣れた人物が駆け足でこちらへと近づいてくる。

「その一匹でラストだよ。お疲れ様。それにしても、システムアシストなしでの動き……また腕を上げたね……ってアレ、どうしたの？」

さっきの戦闘について、若干の興奮の面持ちで語ってくるこの少女の名は《アーシェ》。透き通るような水色のストレートヘアとコバルトブルーの瞳が特徴的なこの少女とはベータテスト時代からの友人である。おそらく、壁に頭を叩きつける俺を見て心配してくれたのだろう。（この世界では痛覚が遮断されているため、痛みを感じるなどないのだが……）

「いや、なんでもないんだ……それよりクエストは達成したんだろ？ と、取り敢えず街まで戻ろっぜ？」

先程の出来事を記憶から抹消するべく頭を振った後、アーシェにラビリンスを出ようと催促した。ついでに自然に手を握ろうとしてみた。

「うん、それじゃ……いこうか……」

普通に拒否された。というか、ドン引きしていた。確かに傍から見たらただの拳動不審者だけど……とはいえ、先に歩くとちゃんとしてきてくれるので、まだ嫌われてはいない……と信じたい。

遺跡をしばらく歩き続けると、不意にアーシェが喋りかけてきた。

「そっいえばカイト君……頭大丈夫？」

やけに真剣な表情で尋ねてくる。まだそのことを心配してくれていたようだ。普段は俺に対して少し……いや、かなり冷たいが、た

まにこういった優しい一面を見せる時もある。俺は素直に礼を述べる。

「大丈夫だ。心配してくれてありがとうな。」

アーシエは尚も真剣な表情を崩さず、ゆっくりと告げる。

「ううん。お礼を言われるほどのことじゃないよ……それより、試しに100×100の答えを言ってみて？」

はて？ 急にどうしたのだろうか？ その問題に一体何の意味があるのだろうか？ 疑問は尽きることがないが、問題自体は小学生でもできる非常に簡単な問題だ。おれは取り敢えず答えを言った。

「おいおい、バカにするなよ……そんなの簡単だ。1000だろ？」

俺は自信満々に答えを告げる。するとアーシエは屈託のない満面の笑みを浮かべていた。

「うん、いつも通り……!!」

俺がいつもどおりに頭が良かったので、安堵した表情を浮かべるアーシエ。そこまで大袈裟に心配しなくてもとは思いつつも、ちょっと涙が出そうだった。などと談笑しているうちに、出口付近まで差し掛かったらしい。徐々に光が見えてきた。

ラビリンスを出ると、辺り一面に鮮やかな夕焼けが果てしなく続いていた。すると、感銘を受けたかのようにアーシエが呟く。

「綺麗な夕焼け……信じられないなこれがゲームの中だなんて……まるで現実……この世界は私にとってのもう一つの現実なのかもしれない……」

「ああ、そうだな」

本当に心の底からそう思った。多分この夕焼けを見せれば誰もが現実世界のものとして信じて疑わないだろう。俺達は、夕日が落ちるまでその光景をしばらく眺めていた。

このころは毎日が夢のようで、ただ純粹に楽しかった。現実世界での時の流れを忘れてしまうほどだった。ずっとこの世界にいたいとさえ思えた……

そして、この願望は最悪の形で叶えられる事となってしまう。

1話 『仮想現実』（後書き）

ラビリンスを読んでいただき有難う御座いました。
宜しければ感想の方をよろしくお願い致します。

2話 『束の間の平穏』

「カイト！！！！ てんめえええええ！！！！！！」

ギルド《クローバー》と書かれた看板が取り付けられたドアを勢いよく開けると、最初に飛び交ったのは、労いの言葉ではなく怒号だった。そして、俺を迎えてくれたのは、少女のハグ……ではなく、ドロップキックだった。

「ぐばあ！！！！！！」

突然の不意打ちに対応できず、放たれたドロップキックが俺の鳩尾に綺麗に命中。俺は衝撃で地面を転がり回った。直後、その少女キーリは大きく跳躍して勢いよくマウントを取り、たたみかけるように無数のビンタを浴びせる。

「私を差し置いてアーシェと二人きりでクエストとはいいい度胸じやねーか！！！！ カイト……てめえ、覚悟できてるんだろうな？」

尚も続けられるビンタ。この世界では痛覚が遮断されているので痛みを感じることはない。しかし、プレイヤーキル可能なゲームなので、HPがみるみるうちに減っている。（この少女は、何分筋力パラメータが高いのだ）焦った俺は、本気で懇願し始めた。

「ちょ、やめ…………… わかったからやめて！！！！ なんでも言うこと聞くから！！！！！！」

すると、俺の願いが通じたのかビンタの雨が止んだ。ゆっくりと上を見上げると、すぐ近くにキーリの顔があった。あ…………可愛い。

桜色の綺麗なセミロングの髪と深紅色の瞳。そして、何よりグラマラスで美しいボディライン。俺は思わず視姦していた。（これもどうせアバターなのだが……そんなことは気にしない。可愛ければいいよね）

「キモー！！ こつち見んなー！！ …………… それより、何でも言うこと聞いてくれるんだろ？ そういえばクエスト報奨が入ったんだっけ？ それならわかってるよな？」

にやにやと意味深な視線をこちらに向けてくる。うむ。金を使わされることはまず間違いないだろう。俺は財布の中を確認し、覚悟を決めた。

「んじゃ、行くぞー！！！」

キーリに首根っこをつかまれ、街へと催促される。さて、いくら使わされることやら……そう思いつつも、俺は内心で苦笑するのだった。

街をしばらく歩き続け、キーリに連れられて到着したのは、街のずれにある無人の武器屋だった。店の壁には、剣、杖、斧、ナイフ、など数えきれない種類の武器が吊るされている。

「ここは………キーリの武器屋じゃないか。どうしてこんなところに?」

てつきり商店街の方で奢られるものばかり思っていたが、自分の店の品物をもらったところで一体何になると云うのか? そんな俺の心情を知ってか知らずかキーリは溜息交じりに答える。

「ちよつと鞘から剣抜いてみて……」

俺は言われた通り鞘から剣を抜こうとした。直後、異変に気付いた。柄が無かったのだ。一体何故? 思考が脳をよぎったが、俺はすぐに納得する。

「さっきのビンタの時か……」

先程のビンタの時、あまりの衝撃で地面にもひびが入っていた。俺の武器は初期武器に多少の強化を加えた程度なので、あの衝撃を耐えきるほどの強度はなかったのだろう。俺はジト目でキーリの方を見た。

「あ、あはは……ごめん、ごめん。まさか壊れるとは思ってなくて。本当はギルド出た時点で気づいてただけだ。なかなか言い出せなくて……でも、大丈夫だから! もともとカイトに渡すつもりで打った武器があるんだ。取ってくるからちよつと待ってて!」

そう言い残しキーリは扉の奥へと姿を消した。武器自体はいずれ変えるつもりだったから構わないのだが……俺が危惧しているのは値段のことだ。キーリの鍛冶の腕は確かなもので、おそらく右に出る者はラビンスのゲーム内でもそう多くはない。にも拘らず全く客足がないのは、値段が高すぎるためだ。武器の質を考えると多少

高価なものも納得できるが、それにしても高すぎる。武器一本で《転生の書》と同じ値段だ。

などと思案していると、キーリが剣を一振り肩に担いでこちらに向かってきた。

「はい。持ってきたぞ」

渡された剣を鞘から抜き、刀身を空に透かしてみる。すると、赤い刀身が疑似日光と重なり妖しい光を放っている。微かだが魔力の波動を感じる。恐らく《悪魔族》と呼ばれる種属の爪や牙を加工しているのだろう。悪魔族の素材を使った武器は魔力を宿すといわれている。

「一体いくらだ？ クエスト報奨だけでは足りそうにないな……」

俺は訝しげに尋ねると、キーリは取り繕うように答える。

「もちろん代金はいらないよ。そもそも私が壊したんだし……それに、これはもともとカイトに渡すために打った剣だから。遠慮すること無いよ」

あのキーリがこれほどの剣を無償で渡すとなると、何か裏があるのでは？ と思ったが素直に厚意として受け取っておくことにした。（決して、考えるのを放棄したわけではない……）それよりも早くこの剣を試したかった。

「よし、新しい武器も手に入れたことだし、早く次のクエストに行くか！―」

「あ、待て！！ 今度こそ私を連れてけ！！！」

俺は流行る気持ちを抑えられずギルドへと駆け出した

2話 『束の間の平穩』（後書き）

ラビリンスを読んでいただき有難う御座います。

疑問点、質問、誤字報告など何でも良いので何かありましたら、感想お願い致します。

お気に召されたなら、評価等もしていただけると非常に有り難いです。

3話 『ログアウト不能』

「うつらああああ！！！！」

ラビリンスの地下5階。迷宮エリアで、キーリの咆哮が響く。クローバーで合流した俺とアーシェとキーリはヘビーキャット掃討のクエストに来ていた。2人の職業はそれぞれアーシェが魔法使い、キーリが狂戦士^{バーサーカー}である。

魔法使いには、攻撃魔法を中心とする《ウィザード》と補助、回復系の魔法を中心とする治癒^{ヒーラー}魔術師の二つのタイプがあり、アーシェは前者に該当するだろう。加えて、呪いや猛毒等の状態異常の魔法も得意としている。極めて一般的な職業だろう。

一方、バーサーカーは特殊な職業で、職業を選ぶ際にランダムセレクトでごく稀に出る貴重な職業だ。その職業特有のスキル固有スキルというものが存在せずシステムアシストが得られない（通常の職業でもスキルと一部の魔法以外はシステムアシストは得られないのだが……）特殊jobというだけあってレベルアップに消費する経験値も膨大である。

しかし、全パラメーターが他の職業に比べてずば抜けて高く、初期レベルの時点でも通常の剣士の20レベル時のパラメーターに匹敵する。キーリの現在のレベルは2レベル。恐らくこの層程度の敵は大抵が一撃で消し飛んでしまうだろう。

そして今尚、迷宮内ではヘビーキャットの断末魔がこだましている。

「うわああああああ！！！」

「……………」

「死ねええええええ！！！！」

ひたすら無言で呪いの無詠唱魔法を淡々と繰り出すアーシェ。それとは対照的に、「死ねええええええ！！！！」と咆哮を上げ、パラメーターに物を言わせて無茶苦茶に斧を振り回すキーリ。そして2人の攻撃で次々と霧散していくベビードラゴンの群れ。いや、もう普通に悲鳴を上げてるんだが……

俺は先程キーリから受け取った武器を試すべくクエストに行こうと2人に提案したが、現在戦闘に参加していない。理由は2つほどある。

1つは俺が単に俺が2人の戦闘に入る余地がないということだ。
(断じて入るのが怖かったからではない)しかし、もう1つの理由に比べれば瑣末な問題だと言えるだろう。もう一つの理由……………それは

「なんでヘビーキャットなんだああああ！！！！」

無理だ！俺には奴を狩ることなんてできない！！ アーシェの奴……………俺のトラウマをわかった上で敢えてこのクエストを選びやがった。あの時……………俺がクエストボードの前で何のクエストにしようかと思案をしていた時。アーシェに背後から両目を手で覆われ、「私がクエスト選んであげる……………」と耳元で囁かれるのだからたまったものではない。俺はあまりの興奮と喜びで意識を失い、気がつくここにいたというわけだ。

一瞬ヘビーキャットの断末魔が止まる。直後、アーシェの聞きなれた声が迷宮内に響き渡る。

「これでラストよ!!!」

そして、どうやら最後の一匹になったらしいヘビーキャットに呪のような短い詠唱の後、猛毒の魔法を放った。放たれた魔法は文字の形を模していて、文字が相手の体を包み込むと同時に猛毒状態に陥る。

猛毒状態に陥ったヘビーキャットのHPバーはみるみる減っていき、ちょうど赤ゲージにまで達したところで、ヘビーキャットが最後の力を振り絞るように首だけをなぜか俺の方向に向ける。ふむ。何故だ？ 嫌な予感しかない。

「どう……し……て……」

直後、ヘビーキャットの体は甲高いエフェクト音とともに粉々に砕け、ポリゴンの欠片へと姿を変えた。

「……………」

解せぬ。何故俺なのだろうか？ 今回俺は何もしていないのだが……これはシステムで決められたことなのだろうか？ だとしたら何故俺だけに？ 次々と疑問が浮上するものの、耐性ができたのか前回のような奇行には及ばなかった。とはいえ少し具合が悪い。

「いや〜お疲れさま!! カイトが参加しないから、私達だけで終わらせたけど……………よかったのか？」

「……ぷっ……」

戦闘を終えて戻ってきたキーリがまるで悪意を感じさせない清々しい表情で尋ねてくる。しかし、キーリの背中に隠れるようにして戻ってきたアーシエは、先程の一部始終を見て、笑いを堪えきれないという様子だった。悪意100%である。

「いや、大丈夫だ。武器は別に今すぐでなくとも試せるから……それよりアーシエ。一つ聞くが……」

「……ぷぷっ……ん？ 何かな？」

尚も笑いを堪えきれない様子で返答するアーシエ。おのれ……何がそこまで面白い、ドSめ。

「なんでこのクエストを選んだんだ？」

「大変！？ もう就寝時間だわ！！ そろそろ落ちないとー！！」

アーシエは俺の質問をはぐらかす様に会話を逸らし、ありもしない腕時計を確認する真似をした。何と白々しいことか………というか、口調まで変わっている。とはいえ就寝時間なのは本当のようで、すでに荷物、もといアイテムウィンドウの整理を始めている。まあ、別に構わないのだが……

「私もそろそろ落ちる時間だ」

どうやらキーリも落ちる時間らしい。アーシエと同様にアイテムウィンドウの整理を始める。しばらくして、先にアイテムの整理

を終えたアーシェが喋りかけてきた。

「それじゃ、私そろそろ行くね。お疲れカイト君。それにキーリちゃんも。」

「「お疲れ」」

俺とキーリは声をそろえてアーシェに返答する。そこからログアウトの作業に入ったアーシェから視線を戻す。さて俺もそろそろ落ちるとするかな……。そう思い俺もおもむろにアイテムの整理を始める。次の瞬間、作業をしていたアーシェが間の抜けたような素っ頓狂な声を上げる。

「ひゃあ！？　なんで？」

ひゃあ！？　て何だよ可愛いな……。抱きしめてやろうか？　意識が持つて行かれそうになるのを何とか耐え、呆然とした顔をしているアーシェに問いかける。

「一体どうしたんだ？」

問いかけると、途切れ途切れの言葉でアーシェが答える。

「ログアウトが……。できない……………」

そんなバカな……。とは思いつつも、それを確認すべく視界右下にある《システムウィンドウ》を開く。直後、異変に気づく。システムウィンドウの中にあるログアウトボタンがなかったのだ。俺は再度ウィンドウを開きなおしもう一度確認する。しかし、何度確認してもログアウトボタンはない……。俺は一抹の不安を覚えた。

「いや、多分バグだろう。それかシステムが一時的に処理落ちしているだけだ。すぐに回復するだろう。一応GMコールはしてみるが……それまで気楽に待とうぜ」

俺は半ば自分に言い聞かせるようにして呟き、メニューにあるGMコールボタンを押す。アーシェとキーリも俺に同意し、運営から連絡が来るまでの間他愛のない会話で盛り上がった。

しかし、そこから1時間、2時間と時間が過ぎていくにつれてその余裕はなくなっていた。3時間が過ぎたころには、3人とも肩を落として落胆していた。そんな中キーリがポツリと呟く。

「もしかして私達閉じ込められたのか？」

普段の活発なキーリからは想像もできないような蚊の鳴くような声で呟く。俺としても抱きしめて舐めまわしてやりたいのは山々だが、何分俺にもそんな余裕はなく、そんなことをできる雰囲気でもなかった。

「やめてよ！！縁起でもないこと言わないで！！！」

消極的な思考を追い払うように頭を振り答えるアーシェ。アーシェも普段は大人しいが、この時ばかりはイライラを隠せないようだ。長時間ログアウト不能の状況に陥った事によって溜まった不安や疲労感からか、多少の冷静さを欠いている。

「でもGMコール出してからもう3時間も経つんだよ！！　そうとしか考えられないよ！！　そもそも運営何をやってんの？」

キーリの怒りはもつともだ。一時的なものとはいえ、ログアウト

不能の状態に陥る事はクレームだけではないはずだ。利用者からの信頼をなくすだけではなく、場合によっては金銭面でも大損害を出す場合さえある。そもそも3時間待っても運営から何の音沙汰もないのはおかしい。何かが不自然だ……。

もしかすると場所の問題なのかもしれない。そう思い、いったん街へ戻ろうと提案しようとした。しかし声を出すことができなかった。次の瞬間、体が光に包まれ体が消え始めた。その現象は俺だけではなくアーシェとキーリにも同様に起こっている。

体が消え始めていくにつれ、視覚、聴覚、嗅覚と徐々に五感の感覚が無くなり、急速に体温が下がっていく。およそ現実世界の死と酷似したこの現象は間違いなくこの仮想世界における《ログアウト》だ……。体の感覚が徐々に失われつつあるのは、仮想空間とのリンクが切れ始めている証拠だ。

ベータテスト当初こそ困惑したものの、現在ではすっかり慣れたその感覚に身を任せた。俺は、やっとログアウトができることに歓喜する半面、どこか今の状況に先程感じた不自然さを抱いていた。本当にこのまま身を任せても良いのだろうか？ そう感じた途端、急に形容しがたいほどの不安が襲ってきた。

とはいえ、今更体の制御などできない。 早く帰りたい。
俺は薄れゆく意識の中それだけを思った 。

3話 『ログアウト不能』（後書き）

ラビリンスを読んでいただき有難う御座います。

改善点、誤字報告や質問等なんでもいいので何かあれば感想お願い致します。

またこの小説を読んで面白いと思って頂けたなら、できれば評価頂ければ有り難いです。

図々しいお願いですが、どうぞよろしくお願い致します。

4話 『負の連鎖』

「目が覚めた？ カイト君」

頭上から声が聞こえる。徐々に意識は覚醒し、頭から爪先までの失われていた感覚が戻っていく。

瞼を開けるとそこは見慣れた街並みだった。一瞬、現実世界かと思ったが、すぐにそれが間違いだということに気づく。現実世界には武器屋やギルド等が存在するはずはない。

この場所は俺にとって いや、おそらく全てのユーザーに馴染みのある場所だろう。このVR世界において全てが起因する場所と云つても過言ではない。この場所は

「 始まりの街か？ 」

「 そうみたいだね 」

俺の呟きに先程と同じ声の主が答える。俺はおもむろ頭上を見上げる。すると眼前にアーシェの顔があった。先程の声はアーシェのものだったようだ。意識が正常に機能していなかったためか、誰の声か判別できなかったようだ。

とはいえ、ここが始まりの街で間違いないようだ。しかし同時にいくつかの疑問が浮上する。俺の記憶が正しければ、地下5層で全身を光に包まれ、確かにログアウトをしたはずなのだが……。だとしたら何故？ どうしてもわからないことが1つある。俺は、膨らむ疑問をアーシェに尋ねた。

「俺達はログアウトをしたはずだ。なのに何故、始まりの街にいるんだ？」

わからない、といった風に肩をすくめ首を横に振るアーシェ。そしてしばらくの間の後、静かにアーシェが答える。

「わからない……だけど、一つだけわかる事がある。アレを見て」

そう呟くとともに、アーシェが指を差した方向　街の広場の方向を振り向く。直後、俺は絶句した。1万人　いや、ざっと2万人はいるだろう。広場を埋め尽くすほどの数のユーザーがいたのだ。驚愕のあまり思わず口から呟きが漏れる。

「ここに来たのは俺達だけじゃない……そういうことか？」

「そういうこと……」

言い終わり俺とアーシェは同時に溜息を吐く。俺達の間にも若干の諦めの雰囲気が漂っていた。しかし、そんな雰囲気を消し飛ばすような陽気な声が響く。

「おはよー！！　朝ご飯よろしく！！　ってアレ？　ここ何処だ？」

俺の隣で意識を失っていたキーリが目を覚めたのだ。何を呑気な……とは思いつつも、この陰鬱な雰囲気でキーリのような存在は正直ありがたかった。しかし、まだ完全には意識が覚醒していないのか、若干の記憶障害が起きている。

「ここは始まりの街だ。俺達は全員ここに飛ばされたんだ。」

俺はキーリへの説明を簡潔に伝える。するとキーリは、頭にクエスチョンマークを浮かべたまま小首をかしげている。まあ、気持ちに分かるがな……

「私達はログアウトできなくなったでしょう？ その時にGMコールをしたらここに飛ばされたってわけ。」

アーシェが補足説明をすると、全てを思い出したのか、みるみるうちに顔色が悪くなっていく。せっかく人が曖昧な表現で伝えようとしたと云うのに……（決して、説明ができなかったわけではない）。俺達は何をするでもなく、しばらく広場の方で座り込んでいた。

始まりの街に来てから既に1時間が経過した。この間もログアウト不能の状況は継続している。精神的な疲労感からか、人々の不満は最高潮にまで募っている。中には、暴れ出す者さえいた。

そんな中、誰かがポツリと呟いた。 早く帰りたい。

それをきっかけに人々の怒りのボルテージは上がっていく。抑えられていた怒りが爆発する。そう思った次の瞬間、広場内に声が響いた。

いや、その表現は適切ではない。脳内に直接響いた、とでも云うべきか。その現象はどうやら俺だけではなく、広場にいる全員にも起こっているようだ。皆一様にその不可解な現象に首をかしげている。

る。

『ようこそ皆さん。この度は、ラビリンス正式サービスをご愛好頂きありがとうございます』

若い男性の声だった。おそらく、10代後半 あるいは20歳前後だろう。この声には聞き覚えがある。コードギアの発売日、テレビのニュースで聞いた声だ。名前は確か

「
西条守さいじょうまもる」

俺は呟きを知ってか知らずか、嘲笑交じりの声が響く。

『そうです。私は西条守。コードギア、そしてこのゲーム《ラビリンス》の創始者です。』

直後、広場内に動揺が走る。何故こんなところにゲームの創始者が？ もしかすると創始者自ら謝罪に来たのだろうか？ ともあれ、これでやっと帰れるだろう。誰もがそう思ったに違いない。しかし、次の西条の言葉によって、その希望は打ち砕かれることになる。

『唐突ですが、皆さんにはちょっとしたサバイバルをしてもらいます』

サバイバル？ 何故そんな事をしなければならないんだ！？ 他の者がそう不満を口にするより先に西条が言葉を紡ぐ。

『サバイバルといってもルールは簡単です。4人、もしくは5人で1組のチームを組み、最後の1組になるまで殺しあってください』

広場内に静寂が訪れる。この場にいる誰もが西条の云う事を理解できないといった様に啞然としている。また、それは俺にとっても例外ではない。こいつは今何と云った？ 俺の聞き間違いでなければ、殺し合えと聞こえたのだが……。一体そんな事に何の意味がある？ 俺は疑問を隠せなかった。

そしてただでさえ理解不能な現状に追い打ちをかけるかのように西条が告げる。

『尚、現時点を持って、この仮想空間のにおいて一切の蘇生手段は停止します。HPが0になった瞬間、現実世界でも同様に 死 を迎えることになります。』

まるでニュースのアナウンスのように淡々と告げる西条。その声には一切の感情を窺わせない響きがあった。しばらくの間の後、西条が言葉を紡ぐ。

『加えて、コードギアによって遮断されていた痛覚や疲労感、排泄感等やその他の体への負担も解放します』

直後、今まで隣で呆然と石畳に座っていたアーシェが立ち上がり声を上げる。アーシェにしては珍しい……。怒気のこもった言葉だった。

「ふざけないで！……！ 何故こんな事をするの！？」

そう聞かれると同時に、西条は高らかに哄笑し、答える。

『クッククク……そうですねえ。強いて言えば、楽しいから……ですかね』

ブチン！ 瞬間、俺の中で何かが切れる音がした。もちろん、ポリゴンのアバターのには血管なんて物は存在しないが、現実世界の俺の体では脳の血管の1つや2つ切れていてもおかしくはない。それほど怒りを感じた。俺は我を忘れて叫んでいた。

「ふざけたことをぬかすな！！！！ 人の命を何だと思ってやる！！！！ 貴様の目的はなんなんだ！？」

俺の絶叫が広場内にこだまする。しかし、西条から返ってきたのは、素気ない返事だった。

『目的を告げる必要はありません。貴方達はただ黙って云われたことを遂行してください』

尚もニュースのアナウンスのような声で、あくまで実務的に淡々と述べる西条。

『何も四六時中殺し合え……というわけではありません。これからこの仮想空間で生活してもらう上で、殺し合いをしてもらうのはほんの数時間で構いません。それ以外の時間は迷宮攻略に当ててください。』

生活……だと？ まさかこれからずっとログアウト不能の状況でここから出られないってことか？ 次々と告げられる理不尽な要求に耐えかねたかのように、隣でアーシェに支えられて立っていたキーリがポツリと呟く。

「馬鹿馬鹿しい……こんなのやってられないよ……」

覇気のない細い言葉で呟くキーリ。広場に一瞬の沈黙が訪れる。直後、それをきっかけのように次々と皆が不満を漏らす。「付き合っ
ていられるか!」「ただの演出だ!」等の罵声が次々と巻き起こる。中には、「クエストに行こうぜ?」という呑気な声も聞こえる。皆これがオープニングの過剰演出か何かのサプライズとでも思っているの
だろう。しかし、次に西条が発した言葉はそんな俺達を絶望の淵に叩き落
とすものだった。

『尚、以上の条件を無視し戦いを拒否したものには、死、もしくは
コードギアによる洗脳が待っています。これに関しては実際に見せて
ご覧にいきましょう。』

西条の呟きの後、広場内に絶叫が響く。先程クエストに行こうと
仲間を誘って広場を出ようとしていた者が、剣で仲間をめつた刺し
にしている。

「ぐああああああああ!!!!」

ひととき大きな絶叫の後、刺されていた仲間がポリゴンの欠片と
なって粉々に砕け散る。刺していた方は、手から剣を落とし、頭を
抱えて転げまわっている。しばらくそうした後、刺した方の男はピ
クリとも動かなくなった。

『ご覧いただけでしょうか? これが今後この世界においての
死です。そしてコードギアによって洗脳された者も、最終的に
生命活動を停止します。』

ここにいる全員が呆然とその光景を眺めていた。ここまでやって
も尚 いや、ここまでしたからこそこの現実離れた光景に
誰もが目を疑っているのだろう。俺はしばらく何もない空間を見つ
め続け、ただ立っているだけだった。

アーシェとキーリの2人と顔を合わせる。俺達は力のない乾いた笑みを浮かべ、その場に崩れ落ちるようにして座り込んだ

4話 『負の連鎖』（後書き）

ラビリンスを読んで頂き有難う御座います。

差し支えなければ感想をよろしくお願い致します。

尚、この小説を読んで面白いと思っていただけたなら、評価を頂ければ大変有り難いです。

5話 『絶望の果て』 (前書き)

5話 『絶望の果て』

『唐突ですが、皆さんにはちょっとしたサバイバルをしてもらいます。』

そう告げられてから一体どれだけの時間が経っただろうか？ ウインドウにある時刻を見る。時間にすればまだ10分と経っていない。にも拘わらず、先程の出来事から数時間は経ったように感じる。この短時間でそれだけの思考をしたという事だろう。昨日まで日常的に妹のストーキングをしていたことが遠い過去のようにだ。

この10分足らずでいろいろな事情は変わり、ラビリンスはただ楽しいだけのゲームではなくなってしまった……。全てのプレイヤーはゲームに囚われた囚人となり、このゲーム ラビリンスは殺し合いの舞台となってしまった。それも現実世界の命を懸けた本物の殺し合い デスゲームというわけだ。

そして今尚、ニュースのアナウンスのような淡々とした、それでいて一切の感情の起伏のない声で西条が言葉を紡ぐ。

『……また外部からの、コードギア解除、もしくは停止もあり得ません。外部からの干渉が確認された場合は……』

十分な間をとった後、西条がゆっくりと告げる。まるで俺達の内なる不安を煽るかのよう。

『コードギアによって脳に直接ウイルスを投与します』

直後、俺は耳から入ってきた情報を脳が処理する事が出来ず、そ

の場に崩れ落ちるように座り込んだ。ウイルス……？ こいつは一体何を言ってるんだ？ コードギアにウイルスの保存できる場所などあるわけがない……。そもそも と次の瞬間、俺の思考は広場内に響いた一つの怒号によって遮られた。

「嘘だ！……！ そんなの全部ハツタリだ！……！ 第一、製品開発の時点で異常なしと判断されてたって聞くし、発売前の解体分析やベータテストで安全面での保障は確認したって…… テレビでも……」

その声は俺と同じように地面に座り込んでいるキーリのものだった。しかし、途中で勢いが無くなって言葉尻にまるで力がない。ここに来てから……いや、ログアウト不能の状況になってからというもの、いつものキーリの強気の状態は影を潜め、すっかり弱気になってしまっている。まあ、プレイヤーの大半は皆そうだろう。逆にいえばこの状況でいつもと変わらない奴なんて

「そうだよ……！ 仮にそれが真実だったとしても、警察が黙っているはずがない！……！」

いた。そういえばアーシェに関してはいつもとそんなに変わらない印象を受ける。俺が鈍感なだけかもしれないが……。とはいえ、俺もまったく同じことを考えていた……。

警察。

その言葉が出た瞬間、淀んでいた暗い雰囲気にも明かりが灯ったかのように、沈んでいたプレイヤー達の表情に希望の色が生まれる。

「そうだ……警察だ……」

「今に警察が俺達を助けに来てくれる！！」

「やっとここから出られる……」

期待と希望の入り混じった呟きが広場内で次々と湧き起こる。今度こそ大丈夫だ　誰もがそう思っただろう。しかし、何度目になるだろうか？　またしてもその期待はあっさりと裏切られる。

「クッ……クックック……アッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！！」

堪えきれないといった様に高らかに哄笑する西条。

『滑稽ですねえ……絶望したり歓喜したりと……ククク……残念ですがそれはありませんよ』

西条は狂気染みた笑みを浮かべ言葉を続ける。

「まずウイルスですが……“投与する”という云い方には若干の語弊があり、誤解を招いたようです……正確には“書き込む”と云った方がいいかもしれません」

ウイルス書き込む？ そんなことが可能はずがない…… そんな技術聞いたことがないぞ……。

疑問を感じているのは俺だけではない様でこの場にいる全員が一樣に首をかしげている。しかし、俺達は見誤っていたのかもしれない

西条という男の悪魔的とさえいえる程の頭脳を

『コードギアというのはそれ自体が電極の働きをしていて、すべての機体と同じ周波数が流れています。また、これらは電磁的な脳

波リンクを介してその一つ一つの集合体がネットワークとして機能しています。』

加えて。と西条が続ける

『そのネットワークを制御する装置は私の手元にあります。電磁波に乗せられてくる情報　　脳の電気信号はこの装置で統括され、脳の命令を遮断・回収する機能だけでなく、それぞれのギアに新たな命令をくだすことも可能です。』

新たな命令を下せる　　奴は確かにこう言った。それはつまり、その気になれば俺達全員の命を奪う事が可能というわけだ。今、俺達の全てを握っているのは西条だ。生かすも殺すもこの男次第……。

おそらく、ここにいる全員が同じ結論に辿り着いたのだろう。広場内にはまたしても暗い雰囲気漂い始める。しかし、最悪はこれだけでは留まらなかった　　そんな俺達の雰囲気を察したのか、さらに追い打ちをかけるように西条は云う。

『尚、警察が救助に介入することはまずあり得ません。皆さんの体は専門の施設に送られ外部からの干渉が不可能になっています。それに現在僕は貴方達の命を人質に籠城している状態です。仮に、警察に強行突破された場合は、自動で脳に直接情報が入力つまり、ウイルスが書き込まれる仕様となっています。』

直後、広場に焦燥感や危機感といったものが流れはじめる。先程の実践があった所為か西条の声がより真実味をまして響く。もはや、西条の言葉を疑う者はそう多くはないだろう。

しかし。とそんな中、若干の哀れみを灯した声で云う。

『さすがにただ殺し合うだけ……というのも酷ですね。脱出条件を訂正しましょう。脱出条件は二つです』

俺達は、西条が口にする脱出条件に半分は諦めながらも淡い希望を抱き耳を傾けた

5話 『絶望の果て』（後書き）

最近忙しく、投稿が遅くなり申し訳ありませんでした。
次回でようやく一章終了の予定です。

6話 『新たな旅路』

西条から提示された脱出条件は2つだった。

1つはラビリンスの最下層にいるラスボスを倒し、このゲームをクリアする事だ。これも大分 いや、かなりの無理難題ではあるが、最後の一組になるまで殺し合いをさせられるよりは幾分かはマシになったと云える。

とはいえ、このラビリンスは地下120層から連なる超大規模ダンジョンだ。ベータテストでも10層までしか到達できなかったとされている……。ベータテストの期間は約3ヶ月。3ヶ月でやつと10層なのだから、単純計算でも3年以上はかかるぞ……。まあ、ベータテストの時とは違い、人数も多いからもう少し早くはなると思うが……。

そしてもう一つは個人で規定された人数 1人につき約100人のユーザーを殺す事だ。これには明確なるルールが存在しない。殺す手段、タイミング等は一切問わず、睡眠をしている時だろうと食事をしている時だろうと、とにかく殺せばいいということだ。

正直に言つと、こちらの方法の方が効率的であり、それでいて簡単でもある。おそらく、いつ終わるともわからないラビリンスの攻略よりこちらを選ぶプレイヤーの方が多いだろう。俺としても早く帰りたい、というのが本意である。

だが。

だが……プレイヤーキルPKではなく本物の殺人を犯してまで帰る必要はない、

と云うのもまた俺の本意である。こういうと偽善めいて聞こえるかもしれないが、1人が救われるために100人の命が犠牲になるのもおかしい話だろう。

（最も、その一人が妹だったりしたら100人だろうと1000人だろうと殺してやるがな……）

とはいえ、西条のアナウンスが終わったのがつい先程の事。今、広場には嵐の後の静けさとも云うべき雰囲気漂っている。

* * *

『最後に僕から皆さんに、プレゼントがあります。』

そう告げられた瞬間に広場内のざわめきが止まった。そして広場にしばしの静寂が訪れる。

今までの西条の言葉によって、一体何度希望を抱き、同時に絶望しただろうか？ 過度の期待はするだけ無駄とわかっていても、どうしてもその胸に希望を抱かずにはいられない。

そう、俺だけではない。ここにいる全員がそうだろう。やはりこれは演出だったのでは？ 口では悪態をつき、諦めを装っていても心の何処かではまだ期待をしている。

誰だってそうだろう。認めたくない事実を認めるには多少の時間を要する。

これはもはや、人間の性とも云えるだろう。

そして直後、頭上にブウウンという音とともに『何か』が現れる。

『こんにちは。皆さん』

その『何か』とは西条そのものだった。広場内に次々と動揺が走る。おそらくは立体映像ホログラフだろう。これも西条が生み出した技術だ。今頭上に浮いている西条の体は本物の体ではなく、ただの映像という事だ。

狂気を孕んだ笑みを口元に刻み、西条が指を鳴らす。瞬間、プレイヤー全員の体が光の粒子に包まれる。そして、数秒間視界が金色に包まれたのち、やがて、金色の粒子は空気中（といっても酸素が存在するかは定かではないが）に気化し、霧散していった。

んむ？ 今の一連の現象は一体何だったのか？ 一体何が変わったんだ？ そう問おうとして、石畳に座り込んでいるアーシェとキーリの方を振り向く。直後、異変に気づく。

「……………史!？」

俺の真後ろで石畳に座り込んでいたのは、見慣れたアーシェとキーリの顔ではなかった。

そして俺はアーシェの顔を見た瞬間、絶句する。

腰まで届くほどの美しい黒髪に小顔の　　それでいてしつかりとした顔のライン。その顔には大きな翡翠色の瞳にずっと通った鼻筋、そしてその下に綺麗な桜色の蕾のような唇が寸分変わらず配置されている。まだどこか幼さの残る顔立ち　　そしてきゅっと引き締まった肢体は、俺が溺愛してやまないこの世で唯一無二の妹だった。（描写がやけに詳しいのは断じてシスコンだからではない）

そして、アーシェも俺の顔を見て驚愕の表情を浮かべる。

「……兄……さん？」

そう言われたと途端俺はハッとして広場の噴水に映る自分の顔を確認する。

どうやら変わったのはアーシェだけではないらしい。水面を覗くと映っていたのは俺が丹精込めて作ったアバターではなった。ふむ、現実世界の俺の方がカッコいいな……。小柄だが端整な顔立

どこか中性的な印象の顔はまさしく現実世界の俺のものだった。

（自分で云うのもなんだけど……）

この現象は俺達だけでなく広場全域にわたって起きていた。辺りを見回すと先程までのどこかの勇者やお姫様といった風貌の美男美女の群れではなかった。それを見て俺は確信する。これは仮想空間でのアバターが現実世界での容姿になるといったものだろう。体の質感は明らかにポリゴンだが容姿は明らかにアバターのそれではない。

などと思案していると驚きを隠せないといった様にアーシェが咳く。

「……どうして兄さんがここに？」

「史の方こそどうしてここに？」

俺は史の方を振り向こうとする。直後、そっと背中になにかが触れる感触がした。後ろを振り向くと、アーシェ　もとい史が俺に背後から抱きついていていた。若干の嗚咽交じりの声で史は告げる。

「兄さん……。馬鹿じゃないのかなあ……。いつもいつも危ないことばかりしてさ……。最近是我的相手なんかしてくれないしさ……。このゲームだって兄さんが相手してくれないから寂しくて始めたんだから……」

言いながら史は俺の背中に力無い拳を叩きつけている。ゲーム内のアーシェという存在　その毅然とした態度だけを知っている奴ならば、おそらく目を丸くするだろう。だが史は違う。現実世界の史という存在は泣虫で、人懐っこくて、お兄ちゃんが大好きな（？）ただの少女なのだ。

俺は思わず振り返り、正面からそつと史を抱き寄せる。瞬間、鼻腔を史の匂いで攪られる。思わず理性が吹っ飛びそうになるのをぐつと堪えて云う。

「よしよし、きつかったろ？　もう大丈夫だ。何があっても俺がお前を守ってやるから」

「う……。ふえええええええん！！」

そう言った途端張りつめていた緊張の糸が解けたかのように泣きじゃくる史。なにしろログアウト不能の状況に陥ってからというもの、常に毅然として振舞っていたのだ。精神的なストレスは相当なものだろう。

とはいえ、俺は妹に　史にもう一度逢えた。その事に歓喜はしたが、同時に思いつく。

このゲームに参加しているという事は、この現実世界での本当の命を懸けたゲーム　デスゲームに史も参加させなければならな

いという事になる。

視界左下にあるHP表示がゼロになった瞬間ユーザーは死を迎える。

そう再認識した途端、急に恐怖が込み上げてきた。しかし、膝が震えそうになるのを必死で抑え、弱気の自分を叱咤する。

そう、俺だけではないのだ。今は史だっている。

俺は自分の命に代えても、この小さな存在を　そしてこの暖かな温もりを守らなくてはならない。絶対に失うような事があつてはならないのだ。そう決意を新たにし、より一層史を強く抱きしめる。

「……………」

「あの……………。お取り込み中悪いんですけど……………あたしのこと忘れてないか？」

俺と史がしばらく無言で抱きしめ合っていると、不意に隣から声が響いた。若干の舌つ足らずな口調。俺と史は声のした方向を振り向いた。瞬間、絶句する。

「え〜と…………君はどこの子かな？」

「っな！？　子供扱いすんな！！　ぶっこおすぞ！！」

相変わらずの舌つ足らずな口調。本当にどこの子だろうか？

身長は130cmくらいで完璧なロリだ。ただし、普通のロリとは決定的な違いがある。おそらく世間一般でのロリと称される存在の大半は貧乳だろう。

しかし、こと目の前の少女に関してはそれが当てはまらない。まあ、言ってしまうえばバストが豊満だという事なのだが……。それも半端な大きさではない。D いやEカップはあるだろうか？ 成人女性でもこれほどの果实を持つ人はそう多くはだろう。これが、俗に言うロリ巨乳というやつか……。ロリで巨乳……まったくけしからんな。

そんな事を考えながら、目の前の少女（むしろ幼女）に舐めまわす様な視線を投げかけていると、不意に頬に衝撃が走った。どうやら史に殴られた様だ。史は感情を押し殺した表情でこちらを見つめている。うん、どうやら顔に出ていたらしい。

それにしても、と史は云う。

「この子なんだか雰囲気はキーリちゃんに似てない？」

ふむ。言われてみれば少し いや、かなり似ているな……。特徴的な桜色のセミロングの髪に深紅色の瞳はキーリと酷似していると言わざるを得ないだろう。まあ、キーリはこんなロリッ子ではなかったが……。ん？ いや、待てよ。そう言えば皆が現実世界の容姿に戻っている時、この少女はずっと史の隣にいたような……まさか！？

いや、待つんだ俺。そう決めつけるには些か軽率すぎる。このロリが本当にキーリならば職業は狂戦士バーサーカーの筈だ！！ 確かめてみる価値は……。ある。俺は目の前ロリッ子の肢体を見てゴクリと喉を鳴らす。一歩間違えれば死に至る！！ どうする？ どうする？ どうす……。あ……。柔らかそうな体……。俺の中で理性という名の楔が取れた瞬間だった。

俺はそつと謎のロリツ子の背後にまわり、黙想しゆつくりと接近する。あと30cm……20cm……10cm……よし！！ 今だ！！！！ 活目すると同時に一気に0距離まで接近し、襲いかかる。よし！！ 捕まえた！！！！

まずはその豊満なバストから揉みだき、太ももに掌を這わせる

「うおおおおおおお！！！！ 柔らかい！！ この弾力！！
！そしてこの揉みごたえ！！ 肌もスベスベだ！！ これが同じ人間の肌なのか！！？」

「ひゃあん！？ ……んあ……カイト……何して……ああん！！！」

そこからヒートアップして、バストの中心部にそびえたつ突起乳首にまで指を伸ばし先端を弄り、さらには耳たぶを甘噛みした。

「ハアハア………もう、死んでもいいかも……」

「やあん！！！！ そこ……は……あつ、ああつ、ひいあ、先つちよばつかり……んう……ちょ……やめ、いい加減に……しろ！！！！！」

「ハアハア………ぐべら！！！！！」

HPが一気に赤色になりました

危ねえ………死ぬ……本気で死ぬ……。500あつたHPが現在ではたつたの3です。ふつ……生き残ったぜ……あれだけの体験をしたんだ。このくらい安い代償さ

とはいえ、この怪物じみた攻撃力は間違いなくキーリだな。うん。良かった。良かった。

「良くねえ!!! カイト……お前こんなことして死ぬ覚悟はできてんだろうな？」

うお!? 心読まれた!? 拳を掲げて殴りかからんとしてくるキーリ。わあ、すんごい怒ってる。ちつと調子乗りすぎたかな？

「殺す!!!!!! 絶対に殺す!!!!!!」

「待つて!! 俺、今HP3しかないから!? 攻撃掠っただけでも死んじゃうから!? それに、これはキーリかどうかを確かめるためにやった事だから!? 史もなんか言ってる!!」

「兄さん……最低………死んだ方がいいと思う」

軽蔑の眼差しをこちらに向けてくる史。そんな……史までそんな事を言うなんて!? あの優しかった史が!? まあ、反省はしている。後悔はしていないが……。

だって普通気づかんだろう。まさかキーリがこんな口リツ子だったとは……。まあでも、アバターというのは得てしてそんなものだろう。というか、バストに限ってアバターより数割増しでかいというのはい体どうなんだ？

「おい、カイト!! 言い残す事はあるか？」

「ふっ……お前の体……気持ち良かったぜ」

殺されかけた。

しかし、この呑気（？）なやり取りから一転、今まで沈黙していた西条の言葉により急に現実に取り戻される。

『お気に召していただけたでしょうか？ 僕からのプレゼントは以上です……それでは皆さん、クリアを目指して頑張ってください。健闘を祈ります』

高らかな哄笑とともに、西条の映像は消えていった

そして訪れる一つの静寂。

その静寂を破ったのは一つの怒号だった。

「ふざけるな！！ 俺達は結局どうなるんだ！！！」

そしてそれをきっかけに、今まで抑えられていた人々の負の感情が一気に爆発した。

「助けてよ！！！！ ここから出してよ！！！！！」

「嫌だ！！！！ こんな嘘だ！！！！！」

「殺す！！！！ 殺してやる！！！！！」

「うわああああああ！！！！！」

悲鳴、懇願、怒号、罵声等が広場内に木霊する。恐怖や憎悪といった負の感情が辺りに火をともしたかのように次々と広がっていき、負の連鎖となって人々に伝染していく。中には発狂する者や「殺す」

とひたすらに繰り返す過激な発言をする者もいた。こうなってしまうえば秩序が崩れるのも時間の問題だろう。

「史！！ キーリ！！ ちょっと聞いてくれ……」

俺はさっきより若干表情を曇らせている史とキーリに向けてそつと耳打ちをする。

「取り敢えずここを出よう……多分ここにいれば時期に殺し合いが始まるかもしれない……どちらの脱出条件を選ぶにしても、まずはレベルを上げなきゃ話にならない……」

「私もそう思う」

「あたしもどーかんだ」

でも、と史は云う。

「やっぱり……人殺しだけは嫌だな……。どれだけ時間がかかってもいいからそれだけは避けたいな……」

俺としては正直なところ早く現実世界に戻してやりたいという気持ちもあった。しかし、本人が否定するのならば強要はできないだろう。それに、仮に100人殺したとして、現実世界に戻れるという保証はどこにもないのだ。まあ、それを言えば迷宮攻略も然りだが……。俺だって出来るなら人殺しなんてし拓はない……。

「わかったよ、史。んじゃ、善は急げだ。さっそく次の拠点にいく」

「あ……待って!!」

歩きだそうとする足を史の制止によって止められる。一体どうしたろうか？

「呼び方なんだけど……史じゃなくて、アーシェって呼んでくれないかな？」

「ん？　なんでだ？」

「現実の名前で呼ばれると、その度に現実世界の事思い出してつらくなるから……それに、どっちが現実かきちんと区別をつけたいから……兄さんにも甘えなくなるし……ね？」

うふふ。何この子可愛いわ。思わずオカマ言葉になるくらい可愛いわ。思わず抱きしめたくなった……っていうか既に抱きしめてるがな

まあ、俺としては史って呼びたいけどこんなこと言われちゃ仕方ないよね……。俺は史の頭を撫でながら答える。

「わかった。そこまで気が回らなくてごめんな」

「ううん、全然大丈夫だよ。兄さんの事も最初と同じようにカイト君って呼ぶね？」

「……………」

「この世の終わりみたいな顔しないでよ……冗談だから……」

「じゃあ、今まで通り。にーにーって呼んでくれる？」

「わかりました。変態さん」

「ごめんなさい……兄さんでいいです……」

くそう。さり気なくにーにーと呼ばせようと思ったのに、駄目だったよ……。さすがは我が妹だ……。おっと、周りの雲行きが怪しくなってきたな。悪ふざけもここら辺にしておかないと……。

「それじゃ、行くぞ！！　アーシェ！！　史！！」

「あ……良かった。あたし忘れられたかと思ったよ……」

「忘れるわけないだろ？　俺はキーリの事も愛してるぜ……ぐべら」

「ひゃ……触んな！！！」

こうして俺達の終わりの見えない長い、長い旅が始まった

正直俺一人ならば絶望に打ちひしがれて自暴自棄になっていたと思う。俺が今こうして在れるのは、間違いなく2人のおかげだと思っから……。

でも俺達ならきつと前を向いていける。心からそう思った

6話 『新たな旅路』（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません。
次話からやつと次章突入です。

1話 『現状考察』（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした（汗
やっとの事執筆開始です。

1話 『現状考察』

朝、窓から漏れる朝日を顔に浴び目を覚ます。辺りを見渡すとそこは見覚えのある部屋だった。

「俺の部屋……………」

なんで俺の部屋にいるんだ？ 俺は確かクエストに出ていたはず……………とそこまで考えて思い出す。

ああ、そうか確か《転生の書》でSS級の赤龍狩りのクエストから帰ってきたんだっけ
瞬間、俺の思考は他の音声によつて遮られる。

『昨日の死者3名 残りのプレイヤーは8000名となりました
』

若干ノイズの混じった機械音声が直接脳に刷り込まれる。
同時にプレイヤー全員に配られる携帯電話 に酷似した通信端末の着信音が響く。俺はそれを手に取り、送られてきたメールを確認する。その内容は死んだプレイヤーの顔写真とオンラインネームが提示されているといったものだった。

俺はそのメールの顔写真に知り合いの顔がないのを確認し、安堵して胸を撫でおろす。

3人……………か。この場合は3人も死んだ、というより3人しか死ななかつたと云う表現が適切だろう。ゲームが始まって当初はそれこそ1日に何十人、何百人という数のプレイヤーが死亡し、ゲーム開始3ヵ月後にはおよそ5000人ものユーザーがこの世界から、そして現実世界からも永遠に退席した。現在に至っては、2万人いたユ

ーザーが半分以下に激減している。

しかし、時間の経過につれ、最終的には死傷者は指の数ほどになった。と云うのも、ユーザー達がこの世界で生き抜くための術と知識を身につけていったからだろう。この世界ではスキルと魔法が物を言う世界だ。よって、より強いスキルや魔法を身につけている者が強いというのは必須である。

そして、魔法やスキルといったものは一ター朝で習得できるものではない。モンスターを狩った際に手に入る経験値を一定値に溜まると　つまり、レベルアップすると支給される《スキルポイント》と《マジックポイント》を習得したい系統のスキルの割り振り、その数値が規定された数を満たすと習得が可能になる。

その他にも《能力値ポイント》というものがある。これも他と同様にレベルアップ時に支給されるポイントで、ステータスの有無に関わるポイントだ。そして、ステータスとスキルは密接な関係にあり、使用する系統の魔法・スキルによって重視されるステータスも大きく変化する。例えば、魔法を使うなら当然魔力スキルを上げなければならぬし、剣士や戦士系統のスキルを上げるならば、物理スキル　筋力や敏捷といったスキルが重要視される。

つまり何が云いたいかというと、この世界で生き抜くための条件端的に云ってしまえばレベルを上げる事が最重要事項ですよってこと。そして、デスクゲーム開始序盤に死者が多数だった理由は、おそらくそのレベル上げが上手く出来ていなかったからだと推察できる。あくまで個人的な見解だが……………。

このゲームはCPUの強さの設定がオンラインゲームの基本よりやや高めに設定されている。よって、初期レベルの時点では下手に

場所を選ばずに狩りを行うと、逆に返り討ちに遭い、この世界から退席 するのが関の山だろう。

しかし、俺を含めたベータテスター達は初期のフィールドの地形やモンスターの相場等も完全に把握していたし、どこで狩りを行った方がより安全に、かつ確実にレベルを上げられるかもわかっていた。つまり、ベータテスト上がりというのはそれだけで他より大きなアドバンテージになるという事だ。

そもそも、死亡人数が少なくなったのは非戦闘員が増加の傾向にあるというのも一つの要因と考えられる。

現在プレイヤーは大きく3種類に分類される。

一つ目は、プレイヤー間で協力してこのラビリンス攻略を目指そうと試みる者たちだ。ゲーム開始から3年経った今ではこれが約半数を占めている。この《攻略組》と呼ばれる集団の中でもいくつかの種類がある。

その中の代表的な一つに「ギルド」と呼ばれるものがある。俺が属するのは《ゼネラルギルド》と呼ばれる所だ。ギルドにも様々な存在があり、ランクというものが存在する。

まず俺が属するゼネラルギルドはギルドの中では最低ランクに位置されていて、規定の資金 《ギル》と表記されるこの世界の紙幣を一定の料金を支払えば、誰でもギルドの設立が可能という制度になっている。故にギルドの加入条件等は確約されておらず、仮にレベルが1の時点でもギルドマスターの承諾さえあれば加入できる仕様となっている。

さらにその上のランクのギルドに《連合ギルド》がある。ゼネラ

ルギルドが無数に点在するのに対して連合ギルドはゲーム内でも2つしか存在しない。ゼネラルギルドと根本的に違い、これは一からの創設が不可能になっている。ギルドとしての実績があり、それだけで人数とレベルの規定を満たしているというのがランクアップの条件だ。

そしてもう一つ大きな違いがある。基本的に連合ギルドはレベルが100以上の猛者で構成されていて、ギルドの加入条件もレベル100に定められている。ギルド員でそれなのだからその集団を束ねる者の力量は計り知れたものではない。ラビリンス攻略も彼らの働きによるところが大きいだろう。

このギルドの大きな役割としては、数あるゼネラルギルドを統括する事にある。クエスト報酬やモンスターのドロップアイテムは一旦ここで微集され、各ギルドの功績に応じて支給されることになっている。

もはや、このギルドが最高位のランクであると言っても過言ではないだろう。

と云うのも、連合ギルドより上のランク 《マスターギルド》
《と呼称されるギルドはその存在自体が定かではないからだ。

ギルドとして迷宮攻略をするわけでもなく、かといってクエストに勤しむわけでもない。そんな最高位としての責務を何一つ果たさずただ在るだけ（と云ってもそもそも在るかどうかも解らないのだが……）のギルドだ。

あくまで噂の域を超えない話だが、そのギルドは運営のPC>player character<で構成されている聞く。まあ、ただでさえ存在自体が不確かなギルドの噂だし、別段気にするほど

ではない。仮にその噂が真実だと仮定しても自分たちに害が及ぶわけではない。いや、むしろ多くの者はその噂を聞き「運営が自分たちを助け出す方法を模索しているのだ」と希望的観測をするだろう。

しかし、俺はそこまで楽観的に考える事は出来なかった。むしろ、一抹の不安を感じさせた。そもそもギルドとして、ゲーム内に存在するなら自由に出入りができるはず（少なくとも閉じ込められてはいないはずだ）である。それだと云うのに報告どころか何の音沙汰もないのは不吉としか言いようがない。

さて、話を戻すと。

つまり、このランク付けされた3つのギルドが中心となって迷宮攻略に取り組んでいるというわけだ。

そして、2つ目は、西条が設定したもう一つの帰還条件

規定された人数100人を殺害し、この世界から消し去る事

を自ら進んで行おうというものである。この集団

通称一《PK組》は、名称から分かる通りPKを生業とし、現在では全体の約2割が所属している。

このPK組は、主に暗殺や不意打ちといった方法で殺害を実行し、普通のギルド員を装って味方を殺すといった手法も多く用いられている。そのため全体の約2割という数字は、あくまで推定人数ではない。

それほどの人数をもつてしても、PKでゲーム内から脱出した者はまだ一人としていない。と云うのもPKが容認されるこのゲームにおいても一応はペナルティと云うものが存在し、攻撃ないしPKをしたプレイヤーには《PKモード》やPVP(Playserv

s p l a y e r）モードといった犯罪フラグが発生し、カーソルの色が赤に包まれる。これらは総称して《レッドプレイヤー》という。

そしてこのレッドプレイヤー抹殺もギルドの仕事に含まれ、俺は実際に見たことはないがレッド抹殺の特殊班も編成されていると聞く。これにも噂がありこの特殊班を引率しているのはマスターギルドの幹部だと云う話だ。

まあ、噂が全て本当ならこれには納得がいく。仮に、運営側

西条の立場からすれば妨害をするのは当然と云えるだろう。簡単にゲームクリアをされては条件を提示した西条も心許ないだろう。（そもそも人を100人も殺すことは簡単な事とは思えないが……）

それなら、このカーソルの色が変色する仕様が用いられたのも頷ける。

しかし。

逆にこれを利用してP Kを行う者も現れ始めた。これはF P K（Flag Player Killer）呼ばれ、何らかの方法で相手をP K状態もしくはP v P状態に仕立て上げ大義名分を利用してそのまま相手を殺すという手法だ。

だが、この手法がゲーム中盤に広がり始め、使用者が多くなった事からゲームシステム上で禁止となった事がせめてもの救いだろう。仮にそのまま放置されていたらゲーム内での死亡人数はどうなっていた事だろう……。想像するだけでも悪寒が走る。

というか、ゲームが中盤に差し掛かるにつれ、死者の死因は迷宮攻略によるモンスターとの戦死より、P Kによる死亡の方が多かつ

たように思う。もし仮に全員がPKに回ったとして、一体どれだけの人数が現実世界に帰れるだろうか？ 数字にすれば二万人いるうちのほんの数百人に過ぎない筈だ。そんな中で現実世界に戻れたところで果たして心から歓喜する事が出来るだろうか？ 少なくとも俺には無理だろう。

出来るならば二万人全員で帰還したい……がそれが不可能なのは火を見るより明らかだろう。

だから。

せめて大切な人だけは守り通し、何としても現実世界に返す。それぐらいなら俺にだってできる。別に自分の力量を過信しているわけでも、ましてや自分の能力に慢心しているわけでもない
そう、“確信”しているのだ。

最後に、3つ目のグループは主に非戦闘員だ。

非戦闘員と云っても、現在ではその大部分が料理や鍛冶、建築や造形等の職人、商人クラスの職業を選択したものだ。彼らは基本的に自らのスキルで手掛けた物品を市場で売り出し、攻略組のサポート役に回ると同時に商売をする事によって生活費を稼ぐと云う事を目的としている。

彼らの多は戦闘スキルやパラメータに乏しく、自らが戦う術を持たない。ごく稀に戦闘スキルと職人スキルを兼用して極める者もいるらしいが……。しかし、それ故にPKを生業とする者たちにとっては格好的になるだろう。PKに対抗する力を持たない彼らは、その力をギルや自らの商売補ったりする
まあ、云ってしまえば報酬を支払い自らに護衛をつけると云う事だ。

おそらくその判断は正しい。仮に両方のスキルを兼用して極めて

いる者がいたとして、戦闘を本業にしているプレイヤーに果たして勝利か敗北の2択を問われれば、後者と答えるのは自明の理だろう。相手が戦闘のエキスパートならばこちらも同じ者をぶつけるのが賢い選択と云うものだ。

実際彼ら職人クラスの人員のサポートは迷宮攻略を進めていく上で、いや、生活していく上で大きな支えになっている。彼らがいなければモンスターやPKと拮抗するための強い武器や防具、レアアイテムを入手することも出来ないし、料理で空腹を満たす事も出来ない。

一応、生活・迷宮攻略に必要な物資はNPCからも入手可能だが、上質な物品となってくると彼らの存在はもはや必須と云っても過言ではない。

彼らのサポートがあり、そしてギルドを中心とした攻略組の働きが歯車として上手く絡み合っている。この歯車こそが、現在の攻略の成果に通じるのだらう。

実際よくここまでこれたものだと思う。最初の頃は右も左も解らぬまま、ただただ人が悪戯に死んで行っただけだった。ゲーム3ヶ月で5000人もプレイヤーが死んだ時には皆が自暴自棄になり、PK組もその数を増やしたものだ。

しかし、レッド抹殺やF PKのシステム規制といった制度が採用される中、PKは徐々にその数を減少させていき、ゲーム攻略に積極的に臨む者も次第に増えていった。そして、ラビリンスの迷宮エリアを超え、始まりの街から次の層へ、さらにその次の層へと攻略が進む内にプレイヤーのレベル水準も上がっていった。

徐々にだがギルドという存在も普及し始め、パーティプレイに徹することにより、ゲーム内での死亡者は日を重ねるにつれ明らかに少なくなっていく、今では稀にだが死亡者の数が0の時だってある。

ゲーム開始から3年という年月をかけて、全120層からなる超大規模ダンジョン100層にまで攻略を進めている迷宮攻略完遂まであと20層、それがこのゲーム ラビリンスにおいての現状である。

1話 『現状考察』（後書き）

毎度変わりのない決まり文句のようになっていますが……取り敢えず。

ラビリンズを読んで頂き有難う御座います。差し支えなければ感想、評価等を頂けると僥倖です。

2話 『日常』

「たっだいま〜っと」

云いながらcloseと看板が下げられた扉を開け、中へと入って行く。

足を踏み入れた瞬間、強い酒の匂いと大音量の音楽に思わず顔をしかめる。辺りを見回すと、音楽に合わせて踊りに興じている者や仲間と共に乾杯をしている者など様々だ。

このゲーム内でも一応は娯楽というものが存在する。それは酒であつたり、いま流れている音楽であつたり、書物であつたり、テレビであつたりするのだが、それらはもちろんシステムで造られた疑似的な物　　つまりデータだ。

そして、数ある娯楽機関の中にゲームというものが存在する。皮肉にもそのジャンルはMMORPGである。ゲーム内に閉じ込められたこの状況でゲーム　MMORPGをするというのも滑稽な話だが、本物の命をかけ、もはやゲームとは呼べなくなったこの環境において普通のMMORPGというのは素朴な面白さがあり、プレイヤーからは好評であつたりするのだ。

まあ、娯楽に関して言えばうちのギルドとて例外ではなく、娯楽に没頭している集団等も多く見受けられる。

実はこの場所こそが俺達のギルド《クローバー》だ。周囲を見渡せば分かる通りこの場所はギルドだけではなく、兼業で酒場としても機能している。まあ、今は営業ではなく単にメンバーがパーティーでも開いているのだらう。このギルドは基本的に祭り事の好きな

奴が集まるので毎日がこんなノリだ……。

俺がしばらくその場に立ち尽くしていると、集団の中の中心にいる人物が俺の存在に気付いたようでトコトコとこちらへ小走りで向かってくる。

「あつ、カー君！！ おかえりなさい！！」

「いつもいつてんだろ……カー君ってのはやめてくれ……」

半ば呆れつつ目の前でアホ毛をピコピコと動かしている人物にそう告げた。この“カー君”というのはギルド間でついた俺のあだ名で（といってもそう呼んでいるのはごく少数だが……）今眼前にいる人物がつけたあだ名でもある。

「ってかお前は参加しなくてもいいのか？」

「僕は給仕の仕事があるから……それにお酒とかあんまり得意じゃないし」

「そーいやそうだったな……それにしても……」

俺は目の前の人物に舐めまわす様な視線で、頭から爪先までを確認して云う。

「ノエル……お前はやっぱりメイド服が似合うな！！」

「僕だっけ着たくてこんな服を着たんじゃないもん！！ 皆がどうしてもって言うから……」

このノエル（ ）という奴は　ギルドで一番の容姿端麗（
男女問わず）を誇り、このギルドの看板娘（？）でもある。長く煌
びやかな銀髪は緩やかにウェーブしていて、すっきりとした顔のラ
インの上を董色の瞳がキラキラと輝いている。華奢で線の細い体つ
き。その風貌は、まるで童話のシンデレラがそのまま出てきたよう
ないでだちだ。

このゲームにおいて容姿や体型は現実世界のそれと酷似したものになる。おそらくノエルは現実世界ではハーフか何かなのだろう。その風貌は純正の日本人のものとは明らかに異なっている。俺はもう一度視線をノエルに移し全身をくまなく観察する。視線をそのままにしてぐるり1周し、今度はノエルの正面に立ち、ぼそりと呟く。

「ああ、どの角度から見ても可愛い」

「何いつてんのさ……気持ち悪いなあ……それよりクエスト帰りでしょ？ 何のクエスト行ってきたの？」

「ん？ ああ、
レッドドラゴン
赤竜だよ」

「ふん、そうなんだ。レッドドラゴンか……って、ええ！？
レッドドラゴンー!?」

急に大声を上げるノエル。そんなに驚くこともなかるうちに……。

「たったひとりで!？」

「うん」

「……………」

答えた瞬間、信じられないと云った様に、ただでさえ大きい瞳をさらに大きく見開いて凍りついたように固まってしまった。まあ、無理もないことだな。何しろあのレッドドラゴンは地下迷宮100層最奥部に潜んでいたボスで、対竜用として編成された特殊部隊をもつてしても打倒するにまでは至らなかったという。それをたったの一人で倒したというのだから、驚かない方がおかしいだろう。

「相変わらずデタラメだね……………カー君は……………」

「最強だからな。俺は」

「そこまで屈託のない表情で言い切れるのは、ゲーム内のどこを探してもカー君ぐらいのもんだと思うよ……………」

ノエルは呆れたようにそう呟いた。やれやれ、強すぎるのも考えものか……………。

とはいえ、さしもの俺もレッドドラゴンと対峙した時は正直焦った。装備も完全な状態だったし、すべての能力を最大限に利用したにも拘わらず、たったの2発掠っただけでHPが半分を切った時は、さすがに肝を冷やしたものだ。

「あつ、そういえばさ……………って聞いてる？」

しかし、このクエストにはそれを補って余りあるリターンがあった。クエスト報酬の高さはもちろんのこと、取れる素材も最上級のものだったし、ドロップアイテムも手に入れた。転生の書は使ってしまったものの、リターンの大きさを考えれば安い買い物だったと

いえる。そもそも

「おい。もどつてこい」

しばらく考えていると、鼻孔を甘い匂いがかすめる。前を向くとノエルが吐息のかかる距離ぐらいにまで接近していた。

「うお、近づい!？」

「あのさ、聞いてる? さっきからずっと呼びかけてただけど……」

言うや否や、さらに身を乗り出して上目使いでこちらの様子を窺ってくる。この表情を見て、男だと疑う奴がこの世界にいるだろうか。こいつ……見れば見るほど女だな……。っていうか顔近い……。

「カー君!！」

「うおお!？ すまん。でなんだっけ? キスしてほしいんだっけ?」

「いや、全然違……」

「任せろ!! 唇がふやけるほどやってやる!——!」

「だから違うよ!——! 話聞きなよ!——!」

ノエルの言葉を遮り強引にキスを試みるも……失敗。残念だ……ノエルの事だから受け入れてくれると思ってたのに……。まあ、機

会はいくらでもある。取りあえず泣きそうになってるから、話を戻してやるか……。

「んで？ ホントは何の話なんだ？」

「あのねえ……………もういいや。キーリとアーシェ姉がキーリの店で待ってるから来いだってさ。」

はて？ 何故キーリの店に？ 俺はまた怒られるようなことをやらかしただろうか？ 俺はおもむろにあたりを見回し、キーリとアーシェが居ないことを確認して云う。

「ん？ なんでだ？」

「カー君……………この前のギルドマッチサボって他の給仕の子と商店街出かけてたでしょ？ おかげで惨敗だったんだから……………」

「え、えつと……………ナンノコトカワカリマセン」

「あと、これは2人からの伝言だけど……………」

しばしの静寂の後、十分に間をとって一語一句を噛みしめるように告げた。

「右足一本だってさ……………」

右足一本か……………。痛そうだな……………行きたくないなあ……………。

「“右足以外全部へし折ってやるから覚悟しろ”だってさ」

「いやだ！！　まだ死にたくない！！！」

聞いた瞬間に全速力でその場から離れる。鍛え上げた敏捷パラメータに物を言わせて足が千切れんばかりの勢いで加速する。しかし、俺が出口にたどり着くより先にノエルが先回りをする。ノエルの敏捷パラメータは俺を遥かに上回る。ノエルの職業はアサシン。その容姿とは裏腹に隠密の名手なのである。

「だめだよ……カー君を逃がしたら僕だってどうなるか……それに」

しばしの沈黙。ノエルの顔に影が落ちる。

「怒ってるのは何もアーシェ姉とキーリだけじゃないからね……」

ゾクリ。

瞬間、背筋に悪寒が走り、全身が凍ったように固まる。理屈ではなく、本能が告げている。これはマジでヤバイ。思考をしたわけではない。俺はただ自分の本能に従い足を動かした。

「すいませんでしたあああ！！！！！」

「……………逃がさない」

そう言いながらただひたすらに逃げる俺とそれを全力で追いかけてくるノエル。こんな騒がしくも賑やかな毎日が今の俺の日常である。

3話 『日常(2)』

「「「……………」」」

場には神妙な雰囲気の流れている。

俺は結局逃げ切る事は出来ず、ノエルに引きずられてアーシェとキーリの待つ武器屋へと赴いていた。現在の状況はというとキーリとアーシェ、そしてノエルの3人に囲まれ、縛られた揚句に無言で正座させられているという状況だ。

「「「……………」」」

なおも続く沈黙。そして徐々に強さを増す無言のプレッシャー。俺はさながら蛇に睨まれた蛙の如く全身が凍りついていた。(といつても縛られているので動く事は出来ないが……) やめて!! そんな目で見ないで!! 気持良くなっちゃうから!!!

「なにか……………言い残すことはねえか？」

最初に沈黙を破ったのはキーリだった。

そう言いながら指を鳴らして一歩、また一歩とこちらに近づいてくる。ああ、短い人生だったな……………だが俺は今日まで懸命に生きてきた。唯一の心残りがあるとすれば、それは

「童貞のまま死ぬのは嫌じゃああああ!!……………」

嫌だ!! まだ死にたくない!!! だって俺まだ童貞だもん!!
!!…これから先、気持ちいいことや嬉しい事がいっぱい待ちかま

えてるかもしれないのに！！！！ どうせ死ぬならもう少しエロい何かと引き換えがいい。

「……………キモ」

そんな俺の魂の叫びを聞いたアーシェとキーリがこちらに侮蔑の眼差しを投げかけ、声を揃えてそう告げた。そんな中唯一ノエルだけが困ったような、それでいて悲しげな表情をしている。一体どうしたのだろうか？ 不意にノエルが前に出て言葉を紡ごうとする。

「カー君……………あのね」

「近づいちゃだめだよ、ノエルちゃん！！ 何されるか分かんないから！！！」

しかし、言葉の途中でアーシェによって遮られる。ノエルはまた、一瞬だけ悲しげな表情を浮かべたが、今度は呆れたような表情になり苦笑交じりに呟く。

「ふと思うんだけど……………皆僕が男だってこと忘れてない？」

「「「「?????」」」」

「……………いや、そこで黙られても困るんだけど……………」

今度はノエルを除く全員が頭に疑問符を浮かべ、何を言っているか分からない、といった風に首をかしげている。そもそもノエルほどの容姿を持つてすれば性別などもは瑣末な問題だろう。

「と、とにかく！！ これ以上ギルドの子が兄さんの毒牙にかか

らないためにも兄さんは責任を持って死ぬべきです……！」

「そーだ、そーだ……！」

逸れかけた話を再び元に戻し、頬を赤らめて怒ったように告げるアーシェとそれに続くキーリ。くそう、このまま切り抜けれると思っただのに……。

「さーて、どうして欲しい??」

云いながらキーリは自らの等身の倍はあろうかというハルバートを、アーシェは杖をそれぞれ手に取り、満面の笑みで俺ににじり寄ってくる。おまけに後ろにはノエルまでいる。

キーリが柄を振りかぶり、まさに手に持ったハルバートを振りかぶらんとしている時、俺は後ろのアイテムポーチに忍ばせている小型ナイフを素早く取り出し、手際良く拘束具を外す。よし、拘束は解けた……！ 全力で逃げようとしたその時、異変に気づく。

（体が……動かない……だと？）

一体何故？ その疑問は直後に解決された。見ると俺の下方には見覚えのある魔方陣が展開されていた。現在この空間で魔法を使えるものは俺を除いて1人しかいない。

「アーシェか」

「……フン。兄さんの考えている事なんてバレバレよ」

俺の呟きにアーシェが鼻を鳴らして答える。

おそらく、この魔方阵から放出される魔力で相手を拘束する魔法だろう。よほどの強力な魔法なのか、それとも単にアーシェの魔力が高いのか、あるいはそのどちらともなのかは分からないが、先程から体を動かそうとしてもピクリとも動かない。

これほどの魔法を瞬時に発動させるアーシェの詠唱速度に内心で辟易しつつも、瞬時に現状を打破する方法を鑑みる。

今、魔法で拘束されている俺は動けない。しかし、それはアーシェとて同じ事だ。継続型の魔法を発動中のウィザードは身動きが取れない。となると、俺に直接攻撃を仕掛けてくるのはキーリのみになる。つまり、俺の生死はどうキーリの身動きを封じるにかかっていると言っても決して過言ではない。

そのキーリの姿を確認するべく辺りを見回したところ、キーリの姿がない。

「……こつちだ」

俺の耳元でキーリの囁く声がする。何とか首だけを動かし後ろを振り返るが誰もいない……。溜息を吐き前を向いたところ、前方に憤怒の表情を浮かべるキーリの姿があった。

「

！？」

俺は声にならない悲鳴を上げて硬直する。目の前ではキーリがハルバートの柄を思いつきり振りがぶっている。今度こそ殺られる！　そう思いぎゅっと目を瞑る。しかし、いくら経っても俺の脳天にヒットするはずのハルバートが来ない……。恐る恐る睨っていた目を開けると眼前にはキーリの顔があった。

「もう、カイトはいつも女の子の事になると見境がないんだから……あたしだけを見てくれないと嫌なんだから……」

そう言いながら怒ったような仕草で軽く頬を膨らませ、俺にデコピンをするキーリ。やれやれ、なんだかんだ言ってもやっぱり俺の事が好きなんだな……。まったく、もてる男はつらい

「ぐばあ！！！！」

しかし、思考できるのはそこまでだった。

どうやら、俺は重要な事を忘れていたらしい。キーリの職業は、その容姿に似合わず圧倒的な戦闘力を誇るバーサーカーである。その強力すぎるパワーにより、俺は武器屋の外にまで悠々にブツ飛ばされた。ただのデコピンで……だ。

しかも、俺はアーシェの魔法でその場に拘束されていたので、その魔法も外部からの物理攻撃で打ち破った事になる。通常、この系統の魔法に物理的干渉で打ち破る事は至難の業とされる。呪縛魔法の解除は同じ魔法を用いることで解除するのが常である。物理的に解除するにしても内部からならまだしも、外部からとなってくるとほとんど不可能に近い芸当だ。それをデコピン一発でやってのけるのだから、さすがはチート職業だ。

そして、今尚勢いを殺さぬまま吹っ飛びつつける俺を、ノエルが鍛え上げた自身の敏捷パラメータで何とか俺に追いつき、空中にいる俺の腕を掴んで止めようとするが　　失敗。むしろ腕を掴んだ事によってノエルも巻き込まれてしまっている。拘束は……解けてるな、よし！！

俺は瞬時に空中で身を翻し、一挙手でノエルを抱きかかえ、詠唱にかかる。詠唱が終わると同時にくりと後ろを向き手を前に突き出す。

「ブリスト
噴射」

そう呟くと同時に掌に超高密度の光の粒子が重なっていく。そして、一気に掌で圧縮されたエネルギーを解き放つ。すると、ノエルを抱えた俺の体は魔法を推進力として進んでいく。超高速で……。

「カー君、早過ぎいいいいいい！！！！」

「手加減はしたつもりだああああ！！！」

俺の絶叫とノエルの絶叫が重なる。いくつもの壁を打ち破ったことで速度が緩和され、ようやくキーリの武器屋にまで辿り着いた。店の中に飛び込むような形で入った俺達の元に心配そうにアーシェとキーリが駆け寄ってくる。

「カイト君、大丈夫だった!？」

「ごめんよう……あんなつもりじゃなかったんだけど……」

おろおろと心配そうに尋ねてくるアーシェとしょんぼりした表情のキーリ。そんなに心配しなくても大丈夫だと云うのに……。俺は2人に爽やかな顔で答え

「ああ、全然大丈夫が割けるように痛い痛い痛い！！！！！！」

ようとしたが無理だった。実はさっき空中を飛んでいた時から痛かったが、一息ついた事による安心感からか痛みが吹き返したのだろう。見ればデコピンしか食らっていないのにもかかわらず、HPバーが半分近くまで減らされていた。レッドドラゴンより攻撃力が高いつてのはどういう事だ……。

地面に横たわっている状態の俺の頭を心配して駆け寄ったアーシエが膝枕をしている。ああ、良い匂いだなあとか思いつつそこで俺の意識はフェードアウトした。

4話 『転職クエスト』

「おかえりなさい……………カイト……………」

ギルドの扉を開け、受付まで行くと、蚊の鳴くような声でそう呟く声があった。昨日の騒動から1日が過ぎ現在。俺は今日も今日とてギルドへ赴いていた。

「おう、ただいまソフィ」

このソフィという目の前の少女はこのギルドの受付嬢である。クールで無口なため、周りとのコミュニケーションは少々残念な部分があるが、基本的にはただの人見知りで、心を開いた相手とは普通に接している。俺も最初の頃はキモがられていたが、今では会話が成立するどころか、普通に冗談を交えるレベルにまで

「おっぱいは大きくなったか？」

「……………キモい」

なっていたかと思ってるのは俺の気のせいだったようだ。というか、ドン引きしている。いや、きっとただの照れ隠しだろう……………だと思いたい。

ズイツ（俺がソフィに近づく音）

ズザザ（ソフィが全力で俺から離れる音）

ただの照れ隠し……………だよな？

「……………それで？　今日は何の用？」

思い出したように話の話題を逸らすソフィ。心なしかさっきよりも距離が離れているのは気のせいだろう。

「ああ、それなんだが……《転職クエスト》を受注したい」

「……………職業は？」

「アークメイジで頼む」

「……………あーくめいじ？」

「ああ」

「……………ちょっと待ってて」

そう言い、ソフィはどこかに行ってしまった。おそらく手続きをしに行ったのだろう。なんか頭に疑問符を浮かべていたが……まあ、それも当然か……。これは俺のではなくアーシェの転職クエストだ。ソフィが疑問を浮かべていたのは、きっと俺の職業とは違ったからだろう。

何故アーシェのクエストかという理由は簡単。昨日の出来事は、やはりデコピンだけで見逃してくれるわけではなく、罰として付き合わされる羽目になったのだ。まあ、転職クエストは本来複数人で行くものなので、何の問題もないのだが……。

この世界には特定の魔法・スキルを行使するための職業というも

のが存在し、その職業にもランクが存在する。転職クエストとは、云ってしまえば職業のランクを上げるための特別クエストである。

クエストといっても報奨があるわけではなく、依頼人がいるわけでもない。試験官NPCによって提示される試練をクリアする事が条件となる。

例えば、初期に選択できるウィザードという職業がある。この職業で、ある一定のレベルにまで到達し、ステータスの基準をたしていればランクアップが可能になる。職業は1次職から4次職まで存在し、アークメイジは4次職に該当する。

職業のランクを上げることは強くなる上で、もはや必須といっても過言ではない。いつまでも1次職のままだと習得できるスキル数も少なく、ステータスにも限度がある。上位ランクのギルドなんかは、ほとんどが3次職以上だからな……。そういえば

「……………お待たせ、カイト」

と、そこまで考えたところでソフィから声がかかる。どうやら手続きが終了したようだ……。

「……………手続きはしてきた」

「おう、サンキューな!!」

「……………別にいい」

「んじゃ、さっそく行ってくるわ」

アーシェ達も待たせてある事だし早く行かないと……。そう思い、ギルドから出ようとすると思いにソフィから声がかかった。

「……………カイト」

「うん？ 何だ？」

「……………無事に帰ってきてね」

「……………ッ！？」

お世辞にも愛想がいいとは言えないソフィの口から、そんな言葉が出ると思わなかった。なんか照れくさいな……。

「当たり前だ、俺を誰だと思ってやがる？」

「……………カイト、強い……………知ってる……………」

「おう、俺は最強だ。だから安心して待ってる」

「うん……………いつてらっしゃい」

「行ってくるー！！」

くそう、嬉しい事言ってくれるじゃねーか、こんちくしょうー！！
俺はさっきより軽い足取りでギルドの扉を開けた

アーシェ、キリー、ノエルの3人と合流し、ラビリンスの地下5
0層目にある試験場へと来ていた。

「4次職の受付はこちらになりま〜す」

受付のお姉さんに気の抜けたような声で催促される。う〜ん、や
けに人間臭いNPCだなあ……。取り敢えず、受付をしなければ…
…。

「すみません……受付いいですか？」

「は〜い、かしこまりました〜」

ニコニコ（満面の笑みでこちらを見つめ続けるお姉さん）

「……」

俺を含めた他のメンバーが沈黙する。何故何も言わないんだ……。
このままじゃ先に進まないじゃないか……。

「大丈夫かな、この人……」

「と、取り敢えずもう一回話しかけてみよう」

困ったような表情で話しかけてくるアーシェ。むう、困った……。

「あ〜、受付いいですか？」

「はい〜」

ニコニコ（満面の笑みでこちらを見つめ続けるお姉さん）

「……」

「またも全員が沈黙する。クソッ、このままじゃ埒が明かない。別の受付の人を頼もうとしたその時、キーリがシビレを切らし、お姉さんの耳元で大声で叫ぶ。」

「受付お願いします……！！！！！！」

「入場料が5万ギルになります」

すると今度は、先程とは比較にならないほどの流暢な日本語で、一語一句はつきりと告げる受付のお姉さん。何だって云うんだ……。

「え？ 入場料取るの？」

「はい、今回からそうなる予定です」

今度はノエルが驚いたように声を上げる。また口調が戻ってるし、そうなる予定って……なんて斬新な理由なんだろう。と、そこで話を聞いていた別の受付のお姉さんが話に割り込む。

「ちょっと、ユキ！！ 駄目じゃない！！ 悪徳な手続きはクビにするわよ！？」

「……………すみません」

「次は許さないからね！！」

「……………はい」

お姉さん（名前はユキというらしい）はしばらく呆然と立ち尽くした後、恨みがましそうな視線をこちらに向けて云う。

「……………依頼の連絡は受けてる。さっさと通りな!!」

そこには先程までのゆったりとした口調はなく、タメ口で鬱陶しそうに吐き捨てるお姉さんの姿があった。

「「「……………」」」

そのあまりの豹変ぶりに、俺達だけではなく後ろに並んでいた人たちまで啞然としている。と、取り敢えず進んでもいいんだよね？

「……………月夜ばかりと思うなよ」

去り際に怨嗟のこもった目で、ボソリと告げられた物騒な台詞は気にしない方向で行こう……………。

入場の時点でかなりの手間は取ったものの、何とかアーシェの転職を懸けたクエストが始まった

4話 『転職クエスト』（後書き）

ラビリンスを読んでいただき有難う御座います。
次回からやっ和本格的な戦闘シーンが書けそうです。

5話 『1次試験』

受付へとエントリーした俺達は、控え室で待機していた。

「……」

試験直前という事もあり、俺達の間には緊迫した雰囲気が漂っている。皆、下をうつむいたまま固まっている。特にアーシェなんかはさつきから微動だにしていない。うゝん、なんだかな……。よし、取りえず元氣付けてやるか!!

俺は下をうつむいたままのアーシェに後ろから接近し、後ろからそつと抱擁し、うなじに舌を這わす。

「うひゃああああ!!」

よほど集中していたのか、俺の接近にすら気付かなかったようで、大声を上げビクリと体を揺らしていた。

「きゃあああ!! 離せ!!」

「うえっへっへっへっへゝゝ、よいではないかゝゝ」

「……」

必死に引き離そうとするが、時すでに遅し。体をきっちりホールドしてうなじに這わせていた舌を耳に這わせ、今度は耳たぶの甘噛みをする。キーリとノエルからは思いつきり奇異の視線を向けられていたが気にしない事にしよう。

「ひゃ……兄さ……やめっ……あう」

「おい、カイト……」

「あ、ごめんなさい……」

何やら反応がちょっとアレになってきているので、ここら辺でやめておこう……。キーリがものすごい形相をしていたし……。なんか、いけない事のような気がしてきた……

「……あ……」

体を離れた瞬間、アーシェが一瞬残念そうな顔を……したと思っただけ、すぐに怒りの形相に戻った。

「「死ね……!」」

「まったく……カー君は……」

キーリとアーシェの声がハモる。そこまで言わんでもよかろうに……。ノエルに関しては拗ねたような表情を浮かべ、こちらを凝視している。しかし、そこに先程までの緊迫した雰囲気はない。どうやら俺の目論見は成功したようだ。

『アーシェ様御一行は、4次職試験会場までお越しく下さい。繰り返します、アーシェ様御一行は、4次職試験会場までお越しく下さい』

機械的なアナウンスの声が会場内に響く。どうやら俺達の出番が

来たようだ。

「さあ、行こうぜ！！！！」

「「待てえ！！！！」」

俺達は大騒ぎでそんなやり取りをしながら、4次職の試験会場へと向かった。

しばらく歩いて、俺達は試験会場まで向かった。

中には特に変わった障害物はなく、ただ一つワープゾーンがあった。おそらくあそこからモンスターが転送されてくるのだろう。

『 それでは一次試験を開始します』

入った瞬間、問答無用でクエスト開始のコールが響く。皆それを合図に一齐に武器を抜く。それと同時にワープゾーンから大量の影が現れる。それぞれが武器を持って身構える中、やがてその影はゴブリンとして形を成していく。

正確には《ソルジャーゴブリン》（レベル100）だ。90層付近から出てくるゴブリンの上位個体で、普通のゴブリンとは違い、一体が強力な上に異常な繁殖力を誇る厄介な奴なのだが

「何だこの程度の奴か……あたし一人で十分だな！！！」

「よかったあ……頑張ろうね、カー君!!」

「数はざっと見積もって三百つてところかな？ 私達の敵じゃないかもね、兄さん」

どうやら俺達の敵ではなかったらしい。皆、それぞれ安堵の表情や余裕の表情を浮かべている。まあ、俺も敵がこの程度だった事に少なからず安心したが……。

「ここはあたしに任せてくれ!!」

そう言い、一歩前に出るキーリ。うーん、一人でも問題はないだろうけど……。まあ、もしもの時は助けに入ればいいだけだし、システムでHP半分以上は自動退場になるし……。特に問題はないだろう。

「オッケー、ここはキーリに任せるわ」

「がんばって〜」

女子達は2人そろってキーリに声援を送っている。いやあ、微笑ましい限りです。

「……僕は男だけどね」

うお!？ 心読まれた!？ まさか、アサシンの特殊能力か？ まったく……俺の身近にはマインドスキャンのできる奴が多くて困る……。

「単に兄さんは顔に出やすいだけだと思うけど……」

と、今度はアーシエ。失礼な、俺ほど心の読みにくい奴はおらんというのに……。現に俺は目の前のキーリのパンチラでエロい妄想を膨らませている事など誰も

「『またエロい事考えてるでしょ（だろ）！！！！』」

3人一斉にハモったな……。俺はそんなに分かりやすいのだろうか……。というか、こんなアホなやり取りをしてるうちに、敵が目前に迫ってきてるんだが……。

「キーリ！！ 前見ろ！！！！」

「よし、任せろ！！！！」

云うが早い、キーリは後ろを振り返り、振り向きざまにハルバートで横薙ぎの一閃。ハルバートには深紅色のライトエフェクトが宿っていた。おそらく何らかのスキルを発動させたのだろう。

ボキユツ。

『『………は？』』

俺、アーシエ、ノエル、そしてその他のギャラリー達。おそらくここにいる全員がその光景に呆然としている。

キーリがハルバートを振り切ると同時に、ボキユツと何かが弾ける音とともに三百ほどの数のゴブリンの上半身が綺麗に吹き飛んでいた。おそらく一度の大量虐殺にシステムの処理が追いつかなかったのだろう。

しばらくすると、会場内のあちこちからパリィィン！！！といういつも通りの無機質なエフェクト音とゴブリンのおぞましい断末魔が会場内に響き渡る。

「……………エッヘン」

どうだ、と云わんばかりにその豊満な胸を精一杯反らし、見た目に似合わないハルバートを宙に掲げ、辺りを見回すキーリ。恐るべしバーサーカー……。勝てるとは思ってたけど、まさか一撃で片を付けるとは……。

「あたしが最強だぜ！！！！！」

『『『……………』』』

そう高らかに告げるキーリをよそに、全員動揺を隠せないようだった。

『えと…………い、一次試験合格です。そのまま控え室でご待機ください』

一拍遅れて我に返ったアナウンサーが一次試験終了の合図を告げる。

皆が目を点にして見守る中、バーサーカーってやっぱりチート職業だなあと内心で再認識するのだった。

5話 『1次試験』（後書き）

ラビリンスを読んで頂き有難う御座います。

本格的な戦闘シーンとか云いつつ、一瞬で戦闘が終わってしまった

……orz

次回はもっと接戦にするつもりなのでご容赦をw

6話 『激闘!!』

無事一次試験を突破した（といってもほんの一瞬で終わったが……）俺達は、二次試験も難なくクリアし、三次試験にまで到達していた。（因みに二次試験もキーリが一瞬で終わらせてしまった）

『 それでは三次試験を開始します 』

試験開始の合図とともに、ワープゾーンから新たに黒い影が現れる。

「さあて、次も一撃で片付けるぞぉ〜」

「この調子だと三次試験も楽勝かもね、アーシェ姉」

「まだ私達は何もしてないけどね……………」

皆、一次と二次を軽々と乗り切った安心感からか、その表情には自信が窺える。キーリに関してはまた一撃で片付けるつもりらしい……。もしかしてこの試験で、俺の出番はないかもな

なんて思っていたのだが。

影が形を形成し、姿を露わになっていくにつれ、自分の考えの浅はかさを思い知る。影の大きさからして今までのモンスターとの格の違いが解る。

姿が完全になる頃には、皆言葉を失い、啞然としていた。会場内がシーンと静まり返る中、そのモンスターの空気さえも震わす様な

咆哮が耳につく。

「ゲアアアアアアアア！……！」

そしてその咆哮が収まった頃、会場内の誰かがポツリと呟いた。そう、禍々しくも美しい巨躯。そして見る者の魂を射抜くその赤き瞳は紛れもなく

「レッドドラゴンだ……」

声の主はアーシェだった。そう言いレッドドラゴンを眺めるアーシェの視線は鋭い。その表情からは先程までの自信は消え失せ、不安の色さえ窺える。というか、指先が震えている。よし、ちよつと元気付けて

「兄さん！……！」

「うお！？ なんだ？」

「頑張ろうね……！」

どうやらその必要はなかったらしい。アーシェはそう言うとともに、振り向きざまに笑顔を作って見せた。お世辞にも普通の笑顔とは言い難く、無理やり作ったような歪な笑顔だったけれど、それは俺の目にはとても美しく見えた。（単に容姿的な意味ではなく……）まったく……強がり言いやがって。

「おう……！」

だから俺はそれに精一杯答えた。そしてそう思ったのは俺だけで

はないようで

「うん!! 頑張ろうね、アーシェ姉!!」

「素材で何の武器つくろっかな〜」

キーリの中では“勝利”の2文字はすでに決定事項のようで、すでに勝った後の事について考えていた。うん、あくまで試験だから素材とかは手に入らないけどな……………。

「グアアアアアアアアア!!!!」

もう一度、咆哮。

そして今度は、近くにいる俺達をはつきりと見据え、涎を垂らしながらこちらに猛進してくる。

「皆、来るぞ。構えろ!!!」

俺の合図とともに、それぞれが臨戦態勢になる。

集中、集中、集中。

体の中の五感が研ぎ澄まされていく感覚。腑抜けた頭のスイッチを切り替え、爪先から頭頂部までありとあらゆる神経を加速させる。余分な情報をカットすると、周囲の雑踏や音声が徐々に遠くなる。

来る。

レッドドラゴンの腕が振り下ろされる。しかし、振り下ろされた腕は俺達にヒットすることなく空を切る。俺達は直前で回避し、四方へと散会ししていたのだ。

相手の攻撃を回避し、一番最初に口火を切ったのはノエルだった。持ち前の敏捷パラメータを駆使していち早く接近し、首の後ろ（人間で云うと大体うなじ辺り）に迫っていた。

幸いその接近にレッドドラゴンは気づいていない。多分、アサシンの固有スキル《隠密》が発動しているのだろう。見事な手際で腰から短剣を抜き、目にも止まらぬ動作で短剣を這わせる。やけに予備動作が大きい……。おそらくアサシンのもう一つの固有スキル

《即死》を使う気だろう。

即死スキルとは読んで字の如く、相手を即死させるスキルだ。ノエルの奴いきなり決めにかかる気が……。ノエルの短剣が寸前まで迫る。勝負は決したかと思われた……。しかし。

ガキイイン。

「え？」

驚愕のあまりノエルの口からそんな呟きが聞こえる。俺を除く他の二人（キーリとアーシェ）もそれは同じで、信じられないといった風に漠然とその光景を眺めている。

信じられない事にアーシェの短剣はドラゴンの皮膚に阻まっていた。それだけではなく、攻撃したノエルの短剣が折れてしまったのだ。いくら即死といえど、当たらなければ意味を成さない。

そしてこのスキルの最大の弱点。それは硬化時間だ。《即死》は必中の一撃必殺であるが故に硬化時間が長く、また予備動作も大きい。一度攻撃を阻まれてしまつては、袋叩きにあう事はもはや必至。

ただでさえタイミングが大事なスキルだと云うのに。ノエルの奴……決着を急ぎ過ぎだ。

攻撃された事によって、ノエルの存在に氣いたレッドドラゴンが後ろを振り向く。全てを破壊しつくす業火の焰。まずい、ブレスが来る！！ブレスなんか食らったら一撃でアウトだぞ。

だと云うのに、ノエルは一向に回避する素振りを見せない。まだ即死スキルによる硬化時間が続いているのだろ。助けなければ！！

「お前の相手はあたしだ！！！」

云いながらドラゴンの頭上にまで跳躍し、ハルバートを振り下ろすキーリ。

ガキイイイン。

その刃はまたしても阻まれる。キーリほどの攻撃力をもってしてもその刃は届かない。ドラゴンには単なる物理攻撃は効かず、《属性付加》がされていなければ、ダメージはおろか動きを止めることすらできない。

ドラゴンは四方に散った俺達全員が射程圏内に入るよう、上空に飛行し、既にブレスの溜め動作に入っている。それに気づいた俺は即座にウィザードであるアーシェに目配せをする。俺の意図が伝わったようで、一度頷いた後、アーシェはすぐに詠唱に入った。

俺もそれとほぼ同時に詠唱をする。クソ、間に合うか！！そして、遂にドラゴンのブレスが射出される。荒れ狂った様に躍動する焰。それが俺達を飲み込む寸前にかき消される。

「ライジングボルト！！！！」

俺とアーシェの声が重なる。まあ、技名言う必要はなかったけど、そこは雰囲気というか、ノリというか……。そこら辺はさすがに兄妹、以心伝心だね！！ うん、事前に打ち合わせしてただけですが、何か？

なんだかんだで俺達の魔法

ユニゾンマジック
複合魔術の詠唱が間に合い、

ドラゴンのブレスを相殺したわけさ。いや、その言い方には語弊があるか。俺達の魔法はブレスを打ち消して尚、生きている。

まるで矢のように飛んで行った魔法は、空中にいるレッドドラゴンに向かって、黄色い閃光を撒き散らしながら一直線に進んでいく。

寸前で低空飛行に切り替え、回避を試みるも避けきれず。結果、俺とアーシェの放った魔法はドラゴンの片翼をもぎ取る。

「ギャオオオオオオ！！！！！！」

ドラゴンの断末魔がフィールド内に木霊する。片翼をもがれたドラゴンはそのままだバランスを失い、落下する。そして、それぞれが追撃の準備をする。

物理攻撃の聞かないノエルとキーリは《魔法具》による遠距離攻撃に、アーシェは連続詠唱を、そして俺は特殊スキルによる属性付加攻撃の動作に入る。

しかし。

腐ってもレッドドラゴン。最強の生命体を模したモンスターだけあって、一筋縄では勝たせてはくれなかった。

プレスによる奇襲が不可能と見るや、地上に着地して、咄嗟に物理攻撃に切り替え、その長い尻尾を鞭のようにしならせて薙ぎ払う。

しかし、その後の俺達の対応も見事なものだった。アーシェは詠唱キャンセルをし、無詠唱魔法でバリアを、キーリとアーシェは同時に空中で身を翻し、一回転をする。そして、チラチラと見え隠れするスカートの中身に、動く度にたゆんつと躍動する二つの果実

「……………がふっ」

なんて事に気を取られてたら攻撃をモロに食らってしまった。危ねえええ！！！！HP半分ギリギリ。もうちょいで《強制転移》させられるとこだったぞ！！

「ちょ……………カイト！！！！」

「大丈夫！？カー君！！！！」

「何やってんの、兄さん！！！！」

レッドドラゴンの攻撃に直撃した俺を、皆が心配そうに呼びかける。

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫」

「……………やっぱり、魔法の専門職よりは硬化時間が長いのかな

？
」

隣でそう呟くアーシェの声が聞こえた。揺れる乳房とスカートの
中に気を取られていたとは、口が裂けても言えない。

蛇足だが、このフィールド内において“痛覚”は機能しない。運
営によるせめてもの措置かどうか、その真偽ははっきりしないが、
システム上公認されている戦い（例えば、転職クエストやギルドに
よる勢力戦等）は何故だかそういったものがリセットされている。
まあ、仮に痛覚が機能していれば、今の攻撃は悶絶するだけじゃ済
まなかっただろう。

この間にもドラゴンは第二撃目を放とうとしている。冗談じゃな
い！！ 今度食らったら確実にアウトだ。

尻尾による攻撃を見事にヒット（主に俺に）させたレッドドラゴ
ンは、一撃目の勢いをそのままに、その巨大な足で踏みつぶさんと
する。（主に俺に向かって）

ドラゴンの足はそのまま俺の頭蓋を粉々にする 事は
なく、仮想の地面に叩き下ろされた。俺はというと、振り下ろされ
た足から駆けあがり、現在ドラゴンの肩の部分辺りにまで到達して
いた。

そこからさらに駆けあがり、ドラゴンの顔が眼前に現れたところ
で鞘から剣を抜いた。炎属性異常付加スキル 《ファイヤー・
バレット》。刀身には炎属性付加を表す深紅色のライトエフェクト
が宿っている。

そして、ドラゴンの顔面に向けて神速の五連続突き 《ス

ナイプロア』を放つ。五発中一発は外れるも、四発は命中。二発は両方の眼球を抉り、一発は角を叩き折り、もう一発は吸い込まれるようにして眉間へ突き刺さる。

「ギャオオオオオオオ！……！！！」

再びレッドドラゴンの苦悶の雄叫びがフィールド内に響く。頭を振り乱し、のたうち回るレッドドラゴンの頭上にHPバーが表示されている。どうやら今の攻撃で相手さんのHPは二割を切ったらしい。ふう、俺の出番はここで終了だな。後は

「いつけえええええ、アーシエ！……！！！」

掛け声と共にキーリがハルバートを思いつき振りかぶる、そしてそのハルバートの上には

「アーシエ姉！？！」

何とアーシエが乗っていた。ふむ、なるほど……キーリの意図する事は解る。後はあいつらに任せよう。

「うりゃあ！……！！！」

気合いと共にハルバートを投げ飛ばす
アーシエを乗せた
ままで。

「いやあああああ！……！！！」

「ギャオオオオオオオ！……！！！」

二つの絶叫が混じり合う。あいつ……高いところ苦手だったもんな……。

投擲されたアーシエを乗せたままのハルバートはドラゴンの頭部に命中。ギインと鈍い音を立ててその刃は阻まれる。しかし、真の狙いはハルバートを命中させる事ではない。アーシエをドラゴンの頭部にまで運ぶ事だ。

アーシエはというと、直撃の寸前で自ら頭部へと跳躍したようで、暴れ狂うドラゴンの頭部に直接魔法陣を組み立てている。それにしても、快活な魔術師だな……。ウィザードってあんなに動き回る職業だっけ？

魔法陣の完成、つまり詠唱の完了と共に辺りに冷気が漂う。やがて一陣の風が吹き、冷気を巻き込んだ竜巻が起こる。アレは……：アイストルネード（命名、俺）か！？まあ、本当の名前なんぞ知らないが……。

その竜巻の中心にいるレッドドラゴンたちはまち氷漬けになってしまう。頭上のHPバー見る。その数値には0と表示されている。魔法が解け、氷が砕け散るとともに、ドラゴンの体を構成していたポリゴンも甲高いエフェクト音と共に砕け散る。勝敗は決した。

『3次試験合格です。そのまま控え室にてお待ちください』

試験終了のアナウンスがなるとともに、緊張の糸が切れたかのように、その場にくずれ込むアーシエ。

「……………腰抜けちゃった」

「やれやれ、仕方ないな……おぶってやるから、乗れ」

「……………ありがと、兄さん」

「……………いいなあ、僕も……！」

言いながら、アーシェと一緒に俺の背中に乗ってくるノエル。ふっ、両手に花とはまさにこの事。

「アホな事考えてないで、さっさと行くぞ」

「あ、はい」

キーリに冷めた目で催促され、背中に感じる二つに体温に興奮しつつ、控え室に繋がる転移ゲートを潜る。直後、異変に気付いた。

「アレ、この転移ゲート機能してないぞ……………」

俺がそう言うときアーシェとノエルは俺の背中から降り、自分の足で再度転移ゲートを潜る。

「本当だ機能してないね、コレ」

「しょうがないよ……………出口から帰ろう」

出口から帰ると云うアーシェの提案通り、出口の扉へと向かった。しかし

ガシャン。

その扉は閉まったまま一向に動く気配がない。おいおい、どういうことだよ、こりゃあ……。

そこで後ろを向いていたノエルが驚いた様に云う。

「皆！！ アレ見て！！！」

アーシェの指を差した方向　　モンスターの出てくるワープゾーンを見る。直後、その異様な光景に俺だけでなく、キーリ、アーシェまでもが驚愕する。

そこには、九体　　いや、十体だろうか？　それだけの数のレッドドラゴンが犇めいていた。

「ッグアアアアアアアアアアア！！！！！！」

複数体のレッドドラゴンの咆哮が同時に響く。まるで、共鳴しているかのよう。

「嘘……だろ？」

自分の口から思わずそんな呟き声が出た。辺りの出口一帯は通行止め、八方ふさがりのこの状況で、これだけの数のレッドドラゴン。加えて、これまでの戦闘による満身創痍。現在のこの状況を鑑みるに絶体絶命というやつじゃなからうか。

「ハ……………ハハハ」

何か声を発しようとしたものの、俺達の口からは乾いた笑みしか出てくる事はなかった。

6話 『激闘!』 (後書き)

ラビリンスを読んで頂き有難う御座います。

今回は少しだけ長めに戦闘シーンを書いてみました。何分久しぶりに書いた戦闘描写なのでいろいろとおかしい文章になっているやもしれません。

なるべく自分で修正するよう善処はするつもりですが、そのような点が見つかった場合、ご指摘頂ければ僥倖です。

7話 激闘の結末

「グアアアアアアア！」

フィールド内に複数のレッドドラゴンの咆哮が上がる。現在この決して狭くないフィールドは十体のレッドドラゴンによって埋め尽くされている。

そして、複数のドラゴンが突進してくるより早く、アーシェが詠唱を完成させる。詠唱の過程で、複数のレッドドラゴン達の上空に大量の雷雲が増幅していく、詠唱終了時には、大量の雷雲は轟音と共にドラゴン達の頭上に稲妻が落ちる。

そして、それに続く様にキーリとノエルの二人が魔法具による援護射撃を行う。

ドゴオオン！！ という大音量の衝撃音が響いた後、視界を土埃で覆われる。そして、しばしの静寂が流れる。やった………のか？

視界が良好になっていくにつれ、周りの景色が鮮明に写る。そして、視界が完全に晴れた頃、俺の目に写ったのは

「ッ！？」

残りのHPがほんの数ドット、目を凝らさねば解らないほどの瀕死の状態に陥っているノエルの姿だった。

「おい！！ 大丈夫か、ノエル！！！！！！」

「「ノエル（ちゃん）！！！！」」

アーシェとキーリも俺の声でノエルの惨状に気づいた様で、即座に駆けつける。

「……………うう、痛っ」

「これは……………」

瀕死のノエルの惨状を目の当たりにした皆が呆気にとられ黙りこんでしまう。瞬間、俺の思考はノエルに対する懸念より先に、何故？ という疑問が先行する。待て待て、落ち着いて考えを整理しよう。

今、この現状において腑に落ちない点がいくつかある。何故、試験終了のアナウンスがあつたにも拘らず大量のレッドドラゴンが送られてきたのか、これがまず一つ。これに関してはシステムエラーや操作の不手際、強いては何かのイレギュラーであつたと推察できる。それでも、許し難い事だが……。これはいい。よくないが、いい。妥協に妥協を重ね、これだけなら百歩　　いや、一億歩譲っていいでしょう。

そして、二つ目。これは単なる疑問に過ぎないが……。何故、ノエルが攻撃されたにも拘わらず何の『音』もしなかったのだろっか？ 仮にドラゴンによる攻撃だったとするならば、轟音が炸裂するはずだ。いくら視界が不安定だったとはいえ、一挙動の大きいドラゴンが肉薄してきている事に気づかないはずがない。職業がことアサシンのキーリならば、それは尚更。

だからといって、外部からはあり得ない。現在このフィールドは

システム上完全防備の状態だし、出入口は八方ふさがり、この状態での外部からの干渉はほぼ不可能だろう。例えば、『運営』の人間なんか以外は。それに、干渉が仮に可能だったとしても、今の一瞬の隙でそれが出来るとは思わない。たとえ遠距離攻撃に出たとしても、そこに何かしらの『音』が発生するはず。

他に考えられるとすれば内部犯だが……。あり得ないな。それこそ可能性は皆無というものだろう。アーシェとキーリがそんな事をするものか。まったく、なんて事考えてんだ俺は！！ まあ、俺の考え過ぎだろう。おそらく、たまたまシステム音の誤作動が起こっただけだ。

そして、もうひとつ『強制転移』が反応しない事だ。本来HPが半分を切った時点でフィールド外へと強制的に転移させられるはず……。ところが現在のノエルはほんの数ドット。だというのは、強制転移は発動しない。

システムエラーと言えばそれまでだが、決して許容しがたいものがある。それにしても、こうも立て続けにシステムエラーや誤作動が起こりうるのだろうか？ おかしい、何かが不自然だ。

決して無視できない問題だが、そんな事が些細に思えるほど重要な事がある。それは

「なんでフィールド内で痛覚が機能しているのか……………でしょ？」

「ああ、その通りだ」

どうやら、アーシェも気づいていたようだ。まあ、それもそうだ

ろう。フィールド内で痛覚が機能しているのは、ノエルの反応を見れば一目瞭然だ。

それに、痛覚が機能しているとなると 死 の可能性も出てくる。このままHPが無くなるとともに永久退場なんて事もあり得るかもしれない。しかし、本来HPが半分を切ると痛みで意識を保つことすら困難なのだが、残りわずかのHPで意識を保っているノエルを見る限り、おそらく痛みの制約が通常よりは緩いのだろう。それが不幸中の幸いだと云える。

回復薬があれば取り敢えずHP回復と同時に痛みも緩和されるはずなんだが……生憎と試験中にはアイテムが使えないらしい。俺のアイテムポーチは控え室にある。クソ！！ どうしたら……。

「……っあ……ハアハア」

そこでふと俺の視界が、ノエルの顔を捉える。苦しそうに肩を下させていて、心なしか顔色も悪い。傍目から見ても瀕死だと云う事は一目瞭然だった。

それにしても。

「ブツ飛ばす！！！！」

それまで呆けていたキーリが我を取り戻す。そのまま激昂して巨大なハルバートを掲げ、単身でドラゴンの群れに突っ込むとするキーリを片手で制止する。

「待て！！ キーリ！！！！」

「なんだよ！！ 止めんなよ、カイト！！！」

「考えなしに突っ込むな。下手すりゃノエルの二の舞になっちゃう」

俺の言い方に引っ掛かりを感じたのか、キーリはさらに怒りのボルトージを上げて、云った。

「ッ！？ 何だよその言い方！！ お前は悔しくないのかよ！！！」

「……………悔しいさ」

「だったら、止めんなよ！！ あたしの気持ち分かんたろ！！！」

「キーリ……………キレてんのは、何もお前だけじゃねえんだぞ？」

静かに、それでいて怒気を含んだ、腹の底から響くような声でキーリを諭す。瞬間、それまで俺の腕の中で暴れまくっていたキーリが押し黙る。

「20秒……………いや、15秒だ」

「……………え？」

「アーシェと二人で15秒稼いでくれたら、あとは俺が何とかしてやる」

「危険な事を頼むが、頼めるか、アーシェ？」

不意に後ろで話を聞いていたアーシエに話を振る。するとアーシエは首を縦に振って、快く承諾してくれた。

「任せてよ、それくらいお安いご用だよ、ね？ キーリちゃん」

「あ、ああ」

云ってしばらく考え込んだ後、キーリも承諾をくれた。

「お前の狙いはわからないけど、わかった。カイトに全部任せる」

「ああ、任せろ！！」

「「「グアアアアアアアアアア！！！！」」」

そこでタイミング良くレッドドラゴン達の咆哮が重なる。アーシエの攻撃によって与えたノックバック効果が切れたようだ。直後、地響きを鳴らせて複数のドラゴンが突っ込んでくる。

「それじゃ、頼むぞ！！！！」

「「「うん！！！！」」」

まずキーリが大量の《魔法石》をドラゴンに向かって投げつける。が、まったく聞いている様子はない。今度はハルバートによる奇襲。ドラゴン達の頭上へと跳躍し掲げたハルバート振るう。

ガキイイイイン。

やはり攻撃は阻まれる。しかし、物理攻撃が通じないと見るや、

今度はハルバートを投げ捨てる。そのまま、ドラゴンの頭を足蹴にして地面へと加速。着地の同時に眼前にあったドラゴンの尻尾を素手でつかむ。うん？ 何をするつもりだ……。

「ふん……………」

何やら気張っている様子。うん？ 一体何をするつもりだろうか？

「うにゃああああああ！！！！」

気合いの掛け声（？）と共に、ドラゴンの体が宙に浮く。そのまま大きな動作でブン回す。それに巻き込まれて、周りのドラゴンも卒倒したりしている。

「それ……………」

云うや否や、遠心力を利用してそのままドラゴンを投げ飛ばす。後ろに控えていたドラゴン達も一緒になって吹っ飛ばされている。すかさず、アーシェが後退し、それと入れ替わるようにアーシェが前に出る。

おそらく、キーリが交戦をしている間、詠唱をしていたのだろう。先程と同じようにドラゴンの頭上に雷雲が現れる。ノックバックを狙っての事だろう。そして、てきを追撃すると同時に再度土煙が起こる。

視界が晴れると、今度はピンピンしているドラゴン達の姿があった。HPもほとんど減っていない。おそらくドラゴンの《耐性》が働いているのだろう。それ故にドラゴンに二度同じ手は通じない。

そして、立ち上がったドラゴン達は、一斉に口から火炎放射を吐き出す。アーシェが直前で防御魔法を行使しようとするも、手遅れ。放たれた猛々しい焰の渦がアーシェとキーリを燃やしつくす……直前に目の前でかき消される。

「」

は？」

パライイン！！！！

直後、お馴染みのエフェクト音がそこら中で沸き起こる。周囲を見渡しても、あれほどその存在を誇示していた、レッドドラゴン達の姿はなく、在るのはただ粉々になったポリゴンの欠片だった。

しばらくして、閉ざされていた出入り口が開く。よし、取り敢えず。終わったな。

「さあ、行こうぜ！！ 早くノエルを回復させてやらないと……」

「今、一体何が……」

背後からキーリの感嘆の呟きが聞こえる。アーシェも同様に目を丸くして、口を開けたまま固まっていた。一体、何を驚いているのだろうか？ そんな疑問を抱きつつも、ノエルの事が気にかかり、早足でその場から駆けだすのだった

7話 『激闘の結末』（後書き）

最近順調に伸びつつあるのでびっくりしました。

こんな私の拙い文章を読んでくださっている方には、本当に感謝の気持ちで一杯です。

今回は少し短いですが、次話で2章完結……………出来たらいいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6161t/>

ラビリンス

2011年7月31日02時08分発行